1992.4.28

討論の記録

神戸大学闘争史・別冊（1）

〜刊行委員会

目次

序文　1

一九九二年四月二八日の討論記録　2

関連して掲載する表現

講読料についての提起・清水（76年5月）　10

〈神戸大学闘争史〉（仮題）講読の呼びかけ（71年3月）　11

〈闘争史〉発行運動を問うために・その1（71年1月）　13

その2（71年4月はじめ）　17

その3（71年4月おわり）1ページと註　24

松下　昇論・徳永（76年以後に執筆）　28

《五人の集まり》に関する感想・友田（92年5月）　29

（69年〜83年に撮影された写真などは、討論記録の関連個所にそれぞれ掲載した。）

未出現のテーマについて　30

あとがき　31

序文

いくつかの条件の交差に恵まれて、一九九二年四月二八日に神戸大学闘争に参加した五名が集まる機会があった。この日に各人がいくつかの場所を移動しながら語ったテーマの主要なものを記録し、関連する表現を併合して作成したのが、このパンフレットである。

この出会いはかなりの偶然の要素に規定されている。その位置を、かりに可能な限りの神戸大学闘争参加者に参加を呼びかけた場合のメンバーやテーマの範囲と比較してみることにしよう。その場合には多分、次のようなことが考えられる。

①このような呼びかけ自体の根拠や主体が不確定であり、成立しにくい。

②あえて呼びかけたとしても、メンバーやテーマが92年4月28日以上のものになりうるのは、かなり困難である。

③討論の記録や開示には基本的に異和がありうる。討論の持続についても。

これらの三つの推定をもたらす情況は、たんに神戸大学闘争に限らず、任意の大学闘争を含む〜闘争の参加者についても共通しているのではないだろうか。同窓会的に集まりうる形態がいくつかあることも聞いているが、それらは、闘争や、それに関わった自分を過去形で把握している場合に成立可能であると思えてならない。闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体があるとすれば、その例外的な主体にとって、集まり討論することは無意味であろう。他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえているのでない限り…。

私は自分が「闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体である」というつもりも、「他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえている」というつもりもストレートにはない。冒頭に記したような条件に恵まれて参加したというのが最も正確であり、それぞれの参加者にとってもそうであろうと想像する。ただ同時に私を含めてそれぞれの参加者は、「闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体」であろうとし、まだ不充分にしか開示していないとしても、「他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえている」のは確かであると感じている。

このような意味を、大学闘争のみならず、さまざまの名付け難い過程を潜ってきた人々と共に追求していくために、あえて過渡的な記録を〈神戸大学闘争史〉別冊（1）として提出する。討論記録の原案は各参加者に届け、訂正〜補充や、刊行の是非についての意思表示を依頼したが、全員の応答を得たわけではない。むしろ、ためらいの感覚が大きいといってよい。刊行しないことや、東京での〈一九九一・六・二〇〉での場合のように、討論記録と資料を分離して刊行し、前者は私以外の参加者を媒介してのみ配布することも考えたのであるが、あえて統一的に、私の責任で刊行することにした。理由はパンフの内容から判断していただくことができると考えるし、今後の討論でも深化させ続けたい。

〜一九九二年六月〜　　松下　昇

（追記―このパンフの構成作業の時期と刊行の時期のズレについては、あとがきの註を参照していただきたい。　〜一九九三年四月〜　　刊行委気付　松下　昇）

一九九二年四月二八日の討論記録

（五月に松下から記録の原案を参加者へ届け、六月に再構成）

場所ー六甲山のふもとにある学習塾《光でできたパイプオルガン》第一教室（友田氏の住居の一部）～神戸大学教養部構内～松下の住居～阪急六甲近くの食堂を移動しつつ…。

参加者ー五名。座った順に時計回りで紹介（ただし氷山の一角性に過ぎないが）すると…

友田清司（69年神戸大学入学。大学側が学生の主張を権力で押しつぶした直後に再開された授業を拒否し同学年の数人と《星を見ない会》を結成。八年間一回も授業を受けずに中退。71年に大学を去った後、養護施設の職員、紙器製造業（家業の手伝い）を経て、80年より落ちこぼれ対象の塾を始め、92年には宮沢賢治色の強い塾に変身。）

島岡（橋本）和義（66年神戸大学入学。68年末の闘争過程で教養部ストライキ実行委員会（全共闘の前身）委員長となる。69年3月1日事件や封鎖解除後の闘争で松下らと共に起訴され、71年に清水さんたちと共に学費未納を理由に除籍処分。その後、大阪の部落解放同盟印刷工場、法律事務所で働き、現在は和歌山で病院の職員。）

清水早子（68年神戸大学入学。69年以来の闘争過程で橋本氏と二人で結成した飢餓群団は全共闘運動の極点の一つであり、70年11月刊行のビラ・書簡・論文集の「〈前史〉（1）」は他の大学の闘争参加者にも影響を与えた。その後、神戸の印刷・自動車修理工場や南西諸島の生活を潜り、現在は大阪で出版社に勤務し、多様な活動に参加。

佐々木葉二（67年神戸大学入学。反戦会議の中心的な活動家で、69年4月28日の沖縄闘争で重傷を負い、その後、専門を生かした闘争を追求。神戸大学卒業後、大阪府立大学の緑地計画工学の大学院を終了して就職。87年～89年アメリカに留学し、現在まで公園を主体とする都市計画で活躍。詩人・佐々木幹郎は双生児の兄である。）

松下　昇（60年安保闘争をへて63年に神戸大学教養部ドイツ語教官になり、〈六甲〉や〈包囲〉に続く六番目の作品として69年2月〈情況への発言〉を掲示板に張り出して闘争に参加し、B一〇九教室を中心に自主講座運動を展開。大学は、これらを理由として70年5月に告訴し、10月に懲戒免職したが、学内の闘争を法廷へ、さらに大学闘争を契機に明らかにされてきた矛盾の総体と対決する場へ拡大して現在に至る。）

この日にはn年ぶりにそれぞれが出会うことに意味を求めて参加してきたので、あらかじめ討論を（まして、このような記録を）予定していたわけではない。以下に示す当日の討論テーマも、準備なしに各人が語った内容を松下が記憶により断片的に再構成したものである。従って、要約の仕方が主観的であったり、十分に展開されないままの潜在的なテーマを記述から欠落させている場合も多いであろう。ただし、この過渡的な記録の原案に各参加者が補充し、意見をきいてから再構成し、註を加えたので、直接には参加しなかった人々を含む今後の討論や思索に役立てていく媒介にはなりうると確信している。

ランドスケープ対談

人・自然・都市をつなぐランドスケープ。

専門化が進む

アメリカのランドスケープアーキテクチャー。

今井　佐々木さんは、アメリカへランドスケープの研究に行かれて、昨年の秋に帰ってこられたんですね。そのお話の前に、ランドスケープデザインとは何か、まだ一般には充分理解されていないところがあると思いますので、たとえばランドスケープデザインの位置づけとか、その辺からお話しを聞かせていただけたら…。

佐々木　ランドスケープデザインはランドスケープアーキテクチャーという学問領域の中の、特にデザイン分野の呼称なんです。ランドスケープとは、風景ないし景観。アーキテクチャーは建築ですね。ですから、そのまま訳すと、景観建築となるわけです。僕らは環境設計とか、冠茶からある造園と言ったり、そのままランドスケープアーキテクチャーと呼んだりしています。ランドスケープアーキテクチャーという言葉は、1858年に、アメリカのオルムステッドという人が、ニューヨークのセントラルパークを造った時に使ったのが、それ以後定着したわけです。

今井　すでに、アートでもアースワークやランドアートなど、大地を掘ってみたり、景観を非常に意識に入れた彫刻がありますね。ランドスケープアーキテクチャーは、それらのアートとも関連があるんでしょうか。また、日本では江戸時代の小庭園相とか、作庭術のような伝統があったわけですが、それらと、最近のランドスケープデザインとの大きな違いというものはどういうところなんでしょうか？

佐々木　日本独自の庭園から発生した伝統的な技術などは、基本的に、僕らはまず学ばなくてはならないということですね。しかし、僕らの視点は自然をどう空間化するかという点にあります。そこが違いですね。敷地が持つプリミティブな自然の現象を、デザインを通してどう空間化するか。緑だけでなく、水、岩、光、風など、環境を構成しているエレメントをどう取り込んで空間化していくか。その過程で、文化的なものの表現としてアートも入ってきますね。

今井　すでにアメリカでは、大学の中にランドスケープ専門の学科があるそうですが、日本はまだほとんどないですね。それで、建築出身の人がやったり、造園の人達が手がけたりしているようです。向こうでは専門化がかなり定着しているのですか？

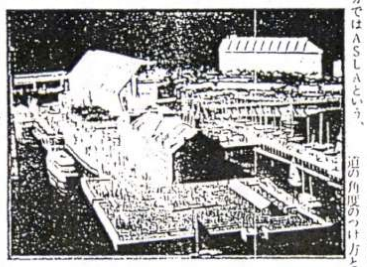
佐々木　ええ、アメリカではASLAという、ランドスケープアーキテクトの学会があります。ASLAに登録することが大事なライセンスになりますし、ライセンスを持った人間でないとできない仕事とそうでない仕事がはっきり分れています。日本ではランドスケープの学部学科が各大学にあることはあるんですけれど、デザイン教育は、まだなされていません。学部そのものは自然科学系（農学部や環境系学部）のジャンルに入っています。建築とアーバンデザインとランドスケープを総合して教育するという発想が、日本の大学の中には少ないようです。

今井　ところで、ランドスケープデザインの方法論として、ひとつには機能的な環境設計、またデザインを重視する方向、さらに造られる施設によってはコミュニティを最優先するなど、三とおりぐらいのケースが考えられると思いますが…？

佐々木　その三つというのは、方法論か別なのではなくて、実際は全部の側面から設計するものだと思います。米国でMITの神田先生とゼミをした時、結局僕はこれを、環境をつくる第一、第二、第三という形から見てはどうかと考えるようになりました。

今井　なるほど、段階的に。

佐々木　ええ。第一の形は、スペシャリストが関わるもの。家でしたら梁、壁、柱、床。都市ではそれを構成する機能構造物。道路、河川やインフラ、構造としての公園施設など。それが第一の形。これには、プロが必要です。第二の形は、それ以外に、構造としては不必要だけれどもデザインとして提案するものです。一本の柱の出方、壁の出方、窓の切り方、窓の角度のつけ方といった形ですね。これはデザイナーとして提案する形です。第三、これは使い手自身が喜べられる形です。それをどのように使いこなすか。たとえば自分の家のカーテンは自分でやる。椅子もテーブルも自分でやりたい。これは建築家とかそういうものにまかせず、自分でやってしまう。それによって、自分の家にしてしまう。都市もそうですね。自分達で何かを造る。落書きするなどということも含めて都市に参加できる形。この三つのパターンが重なりあって、初めて空間がつくられていきます。



今井　今までの建築は、第一、第二のところで造られることが多かったんですね。

佐々木　ええ、そう言えますね。

今井　分業化という面から見ると、ランドスケープデザインには、どういう職種の人が関わってくるんでしょうか。

佐々木　たとえば第一の形でいうなら、植物や土、水をどう扱うかを考える専門家、構造、設備関係などのエンジニアといった人たちですね。第二の形ではデザイナーがいますし、第三の形ではコミュニティデザイナーという住民参加で設計を考える人もいます。また、これ以外にプランニングの専門家もいます。アメリカの場合、非常に明確な分業化が出来ている感じです。日本は、まだ不明確ですね。

住民参加

によるコミュニティデザイン。

今井　なるほど。住民参加型ですか。佐々木さんのそうした体験とか事例がありましたら、具体的に教えていただけますか？

佐々木　サンフランシスコ周辺は非常に住民運動が激しいですね。物を造る前には、必ず市の行政がコミュニティデザイン事務所に依頼してやっています。たとえば、埋立地のなかに公園を造るという場合なら、住民を集めて会議を何回となく行ないます。さらに、住民に委員会をつくってもらって、意見を出してもらいます。そして現地を見て回り、アンケートを取る。それを全部まとめて、大きな壁面などに、住民からの意見を全部、書き出していく。これをさらに住民に配る。このようにして、意見が出てくる過程をデザイナーはすべて見ていて、まとまった段階で、設計にかかるというパターンが多いわけです。ですから、造ったものには住民は「もう一回やりなおしてほしい」とは言えないわけです。みんな納得していますから。

今井　なるほど。

佐々木　それが、果たしていいのかどうかとなると、僕はまだ解決しなければならない問題があると思いますが。

今井　造られるのがスケールの大きい公共的なものですから、住民を無視してできないわけですね。僕がやっているような、アートの立場から言うと、この広場に何か彫刻をつくろうとした場合、現場に行った時に、ふわっと直感的に浮かぶわけです。あとから、人に説明するために理屈をつけたりすることもありますが、やはり、最初から理屈を考えていくことは、あまりないんですね。

「abily」　90年3月号から

（宮沢賢治の詩「告別」が壁に貼ってある塾の教室で、各人が簡単に近況を語った後で）

友田（司会的に）「久しぶりに出会って、世間話だけで時間を費やしてしまいたくないと思うので、特に話し合いたいテーマがあれば、先に提起しておいてほしい。ぼくからの希望は〈革命と夢と死語〉ということばを使ってそれぞれの人がどんな発言をするかを聞かせてほしいということです。」（①）

佐々木「特に何かを語る準備をしてきたわけではないので…」といくらか当惑しつつ、ランドスケープアーキテクトとしての自分の活動や対談を掲載したパンフレット（『アビリー』90年3月号）や、アメリカで指導を受けたピーター・ウォーカーの設計した公園などに関して佐々木氏が写真を豊富に用いて編集した本を配布。（②）

清水「以前の資料の中から見つけてきたものですが…」と、71年1月～4月段階の神戸大学闘争史（仮題）発行委員会の討論やプランを掲載したパンフレット3冊と、71年夏の段階のB一〇九闘争で逮捕された上原孝仁氏の保釈関係の書類を回覧。（③）

（①を媒介しつつ）

松下「それぞれの人が自分の生活の中で大学闘争をテーマにして他者（とくに経験や年令の差がある人々）と語る場合の困難さについて意見を聞きたい。」

佐々木「若い世代は、こちらのいうことに影響されまいとする技術ないし防御の姿勢をもっている。ただ、闘争過程で身につけたユニークな方法を具体的に仕事の中で応用してみせると素直に納得することもある。」

松下「ぼくが他者に伝えたいのは固有の体験というより、時間や空間をこえる普遍的な関係の発見なのだが、うまく伝わることが少ない。これは共通の体験をした人との間についてもいえる。」

島岡「友田氏のテーマとの関連でいうと、ぼくは依然として頑固な共産主義者で、ソ連が崩壊しても、もともと真の共産主義ではなかったのであるし、自分たちにとっての共産主義のあり方をマルクスや、これまでの社会主義の限界をこえる方向で根底的に再検討したい。（後で食堂での話の時に自分なりの方法で大学闘争やその後のテーマを伝える通信の刊行を構想している、とも語った。）

友田「革命は、夢だった。いまでは死語である。大学闘争も共産主義運動も挫折した。権力に敗北しただけでなく、大衆自身がその能力をもっていなかったのだ。ぼくは革命に絶望した時に、例えば芥川竜之介の文学に親近感をもつようになった。」

佐々木「敗北したかどうかは、レベルの取り方でちがってくるのではないか。共産主義という場合もどのようなレベルで、何をさしていうのかが問題だ。」

友田「（ぼくのいう）共産主義は、高校の教科書にも出ている、私有財産の否定だ。」

佐々木「共産主義や全共闘運動はぼくにとっては実現すべき何かというよりは、自由自在に生きていくための手掛かりであったような気がする。また、当時は参加者のそれぞれ

清水さんが作成したビラ

島を見よう！

屋久島の縄文杉が危ない

日本列島は島なのだということ。小さな島々は、この国の崩壊なのだということ。私たちは、海に囲まれ隔かれて暮しているのだということ。……どうして、そんなことが忘れられているのでしょう！　……
都市生活者は、その心と身体を触まれており、触まれていることを自覚することさえできなくなっています。人と人の関係が触まれており、暮しの基本的な衣食住の条件が触まれており、歴史を引き受け続けていく人間としての物の考え方が触まれており、それは破滅にすら向かっているようです。
土にまみれ、海に出て、風と雲の行方を見る暮しの中から都市に戻ったとき、私たちはかろうじて病み始めている自分たちの傷に気がつきます。

鹿児島県の南から沖縄県にかけて、直線距離にして札幌から大阪に至るのとほぼ同じ長さで、台湾のすぐそばまで南西諸島が連なっています。日本の南三分の一は、小さな島々の集合体なのです。
その南西諸島の南の端、石垣島では珊瑚礁の上に空港を作ろうという企みが進行しており、南西諸島の北の端、屋久島では縄文杉にロープウェイをかけようという企みが持ち上がっています。
空港建設計画、ロープウェイ建設計画は共に、公共性、地域の産業の活性化の名のもとに何千年、何万年の想像を絶する長い時間を経てきた生命の群れを、金に変えようというものです。
せいぜい１００年そこそこの生命個体にすぎない人間が、まるで歴史の主人公であり地球の支配者であるかのように、時間と空間を操作しようとする不遜さに対して、そのシッペ返しはもう目の前まで来ています。
忘れてしまったのならほら、思い出さなくてはいけない！私たちは歴史の舞台の一登場者一通過者であり、地球上の無数の生命体の中の一種属にすぎないのだということを。
生命体の遺伝子を組替え、核融合、核分裂をあやつるその不遜さの極みに今至って、もう一度、眼をその少し先へ向けてみましょう。
路傍の草から、海中のプランクトンまで、もちろん街路をゆく私たち人類も、共倒れになるかも知れない未来がそこまで来ているのです。

今、私たちは島を見よう！島は私たちの暮しの原点だと言えます。
土に触れ、海に出ることを通過した視点で文明批判を限っこに捉えない運動は一面的です。
水の流れの音に立つとき、草いきれを嗅ぐとき、森の木々に手を伸ばすとき、私たちは母文化を忘れることがあります。それは私たちの中に生きる自然性です。
７２００年生きてきた屋久島の縄文杉が、人間にみつけられて２２年で今、危ないのです。縄文杉が危ないとき、私たちの未来も危ないのです。
自然の一部としての人間たちと、自然の共存するよりよい社会の実現のために、縄文杉が投げかける問いをひとつの課題としましょう。

町長が打ち出したロープウェイ構想は、川崎製鉄の基本構想そのものなのです。
川鉄資本への批判と同時に、私たちは川鉄労働者と労働運動に交差する呼びかけを始めていきましょう！

1988.10.30

屋久島・縄文杉に連帯する会　0723-31-8968

の固有の領域を尊重しながら活動する態度が不足していた。」

松下「苦しんでいる人がいる限り革命は未来形であり、ますます必要性は増しているのではないか？闘う主体が闘争過程からより高次の発見をして応用していく努力を放棄しない限り敗北はしていない。」（註ー後で考えると、革命の必要性＝未来形への比重の置き方と、革命を求めつつも実際の展開過程に絶望してきた立場＝過去形への比重の置き方のズレを正確に全員で認識しつつ論じた方がよかった。…松下）

島岡「大学闘争の総括という場合、自分が潜ってきた事実をそのまま前提せずに、あの時代のあの情況だったからあのように行動したという視点も必要だと思う。」（註ーこの視点は事実の対象化や、立場の普遍化のために、また他者への伝え方の回路を広げるためにも有効である。ただ、その上でなお、今後のどのような闘争も極限において必ずあの時期と形を変えてはいても同じテーマに出会うであろうし、そのためにも私たちは先駆的な準備をしていきたい。…松下）

（②〜③を媒介しつつ）

佐々木（松下の質問に対して）「風景という概念で設計を考えると十年位前まではバカにされたが、今では基本的な概念になっている。」

清水「私は南の島で生活として海によく潜ったが言葉にできないほど美しく、死ぬならばこういうところで死にたいと思った。他者への伝え方や、革命の問題にしても、言語表現に重点をおく発想には異和がある。」

松下（概念集1の〈バターン・ランゲージ〉について、この概念の提起者であるアレクザンダーに会ってきた佐々木氏の補足説明と共に少し解説しつつ）ランゲージ＝言語について狭く限定して把握する必要はない。建築の作業を共同ですすめていく場合のパターンが文章の各要素に対応して共同の判断の素材として提起されうるように。」

清水「私は釜が崎の住人たちの憩いと交流の場であった天王寺公園が鉄柵で囲まれ有料化されたことに対して撤回させる運動をしているのだが、佐々木さんの意見は？」

佐々木「ぼくは、これまでの撤回運動はポリティカルな面だけが先行していて、使用する人にとっての内在的なプランが不足しているように思う。」

清水「それは私も感じている。」

松下「（清水さんも以前ビラで指摘したように）九州の南の屋久島にある樹齢七千年をこえる杉を観光資源として利用する資本の問題との共通性にも示されている、一見離れているテーマの結合の住民による共有が重要な方法になるのではないか。また、縄文杉の七千年は天皇制や国家の成立以前の時間性を生命の持続性において空間化しているという把握の仕方を公園の利用にも応用できると思う。南の島でも垂直に高い山へ移動すれば、水平に北へ移動した場合に対応する植物分布になってくることも示唆的だ。」

（言語表現の問題を資料や空間に拡大する討論の過程に次のような発言も交差した。）

文化

生と死の境目の島

湾岸戦争後のアラビア湾

石油除去作業に加わって

佐々木 幹郎

アルグルマ島。サウジアラビアの東岸に浮かぶ小さな砂の島だ。アラビア湾に面した石油基地の町、ジュベールの沖合にあって、面積二・八平方キロ。全島に人間の胸までの高さの、美しいマングローブの林が自生している。（ちなみに、世界中の地図で「ペルシャ湾」と呼ばれている湾のことを、サウジの人々は「アラビア湾」と言う）。

一年前の湾岸戦争のとき、このアルグルマ島へもクウェートから大量の油が流れてきた。海上の油は数カ月かけてポンプで吸い上げられたが、岸辺に漂着した油や、海底にオイルボールとなって沈んだ油は、現在もそのまま放置されている。

その島へ、三月十三日から二十二日までの十日間、わたしは団長の辻田啓志氏（六十歳）を中心とする、八人の日本人グループ（アラビア湾と環境を救う会）の一員として入った。マングローブにこびりついた油と、海岸に染み込んだ油を除去する作業のためだ。

× × ×

最初の日、対岸から島を見たときは、想像していたよりも美しかった。海の水は透明だし岸辺には白砂がたまっている。しかし、波打ち際に打ち上げられたホンダワラやコアマモなどの海草類は、どれも真っ黒だった。彼らは必死に、湾の油を吸い取っているのだ。

島の岸辺近くのマングローブは、黒焦げ状態だった。葉も幹も根も、そしてタコ足のように伸びている気根も、オイルを吸い上げてすべて漆黒（しっこく）。気根を手で触ると、太い皮がズルッとむける。中から肌色のミミズのような細い繊維が出てきた。元気な気根は、まるでゴムのような弾力性があるのに。

この島は生きているのか、死んでいるのか。わたしたちは毎日、その境目を漂っていたような気がする。島の周囲は遠浅で、朝十時半には大干潮。午後二時半近くまでその状態が続き、わずか十分ほどで満潮になる。川が逆流するような勢いで、潮が陸地にはい上がってくる。今まで歩けた浜辺もひざまでの海水につかる。その潮に包まれて、マングローブたちは日々、黒い影になった。

× × ×

島の中央部。ここは小高い丘陵部になっていて、満潮時になっても油が流れ込まなかった。この付近のマングローブたちは、唯一、健康な緑の葉を風にそよがせていた。砂地に落ちた種から若葉が芽を出している。カニたちは木々の足元に無数の穴をあけて、うごめいていた。生きているものの姿を見るのは、人を何という安らかな気分にさせることか。

そこに日浜サギの家族が、黄色いくちばしを見せて休んでいるときもあった。このサギたちは浜辺にも数羽飛んできた。まだ生きている貝たちを食べるためだが、わたしにはその白い優美な鳥の姿が、アルグルマ島の墓守のように見えてしかたなかった。この島の生態系は湾岸戦争後、狂ったままなのである。

遠浅の浜辺の先端をスコップで掘ると、まるで油田だ。海水まじりの油がふつふつとわき出る。油が大量に漂着した場所では、厚さ一―四㌢のアスファルトが砂浜から海底まで、えんえんと敷き詰められた状態になっていた。わたしたちはこれを「オイル絨毯（じゅうたん）」と名付けた。これを取り除かなければ、島の周囲は窒息状態が続く。

ここで威力を発揮したのは、日本から運び込んだ備中くわであった。くわで海底のオイル絨毯をはぎ取り、袋に詰める。そして浜辺では四㌢ほども砂に染み込んだ油層をはぎ取り、袋に詰めた。わずか二日間ほどの八人の作業で、四・五トンのオイル絨毯が集まった。

× ×

マングローブには、辻田氏を中心とするスタッフが考案した再生実験をほどこした。幹や気根に、油を吸い取る特殊なパウダーを塗りつける。これは砥石（といし）の粉と思えばいい。パウダーが乾いた後、コンプレッサーで海水を吹きつけて洗い流す。一本一本、手作業でやる仕事だ。流されたパウダーは地表で固まり、ここでも再び油を吸い取る。これはみごとな効果を発揮した。翌日行ってみると、他の樹木と樹皮の輝きが違う。

「そんな手作業で、この島全体の無数のマングローブをきれいにするのに、いったい何年かかるのかね」。ときおり島に訪ねてくるMEPA（サウジアラビア気象環境保護庁）の若い役人がある日、こう聞いた。辻田氏は言った。「この島のマングローブが何本あるか教えてほしい。教えてくれたら何日でできるか計算してあげる」。若い役人はこの一休さん風のトンチ問答に、大声をあげて笑った。

ささき・みきろう　詩人。昭和22年奈良県生まれ。同志社大中退。詩集に「死者の鞭」「風の生活」など、評論に「中原中也」（サントリー学芸賞）など。今回のサウジアラビア滞在中に、詩集「蜂蜜採り」で第22回高見順賞を受賞した。

アルグルマ島で作業をする「アラビア湾と環境を救う会」（筆者撮影）

友田「元全共闘の諸君は、全共闘運動の敗北をきちんと総括していないと思う。それぞれに総括しているかも知れないがぼくには不満だ。例えば東大闘争の過程でマイクロフィルムを全共闘学生が焼いたことについて、その思想的意味が何だったかを元全共闘の諸君は今も語れるのだろうか。」

佐々木「資料としては貴重であり、焼かない方がよいのは当然だろう。」

松下「その資料のある場所を自分を含むだれもが自由に使用できる場合にはそうだが、そのような資料〜空間占拠が物理的に排除される動きに対する抵抗の過程では、自分や空間と共に焼けることがあっても止むをえない。また、東大闘争の場合は、意図的にマイクロフィルムを焼いたというより、暖をとるために研究室内のものを燃やしている際に一部が焼けたというのが事実ではないか?」

清水「言語表現よりも、それを支える現実の生き方に重点をおいて考えたい。発言の場を現在の社会秩序の中で認められている人の言語表現には不信感がある。」

松下「言語表現という場合、③のように国家の言語表現として現実的な力をもつ場合や、個人の言葉が現実との緊張関係において指示する内容を制約されたり、押し広げたり変動する場合の双方に注目している。」（註ー人間の発想や存在様式を規定してくる力に対する姿勢が〈言語〉の発生基盤であり、言語表現はその姿勢の断面としての記号化であると把握している。その限りにおいて言語表現を軽視できない。）

佐々木「ぼくが空間で何かを表現するのは、兄貴が詩で何かを表現することへの対抗意識からであるとも感じている。」（湾岸戦争への言語表現による反対の意思表示でなく、アラビア海岸のマングローブ林に付着した原油の除去作業のため日本を不在にした兄・幹郎氏の詩集の受賞式に代理で出席した話も）

松下「そのような言語と空間の対抗意識が双方の質（根底では同じ情況性をもつ。）を高度化させていくだろう。」

（その他の印象に残ったテーマ）

島岡「住宅ローンをかかえることは本当に重い。これは私有財産ではあるが、もたざるをえない面もあり、共産主義をめざす根拠を失ったわけではない。」

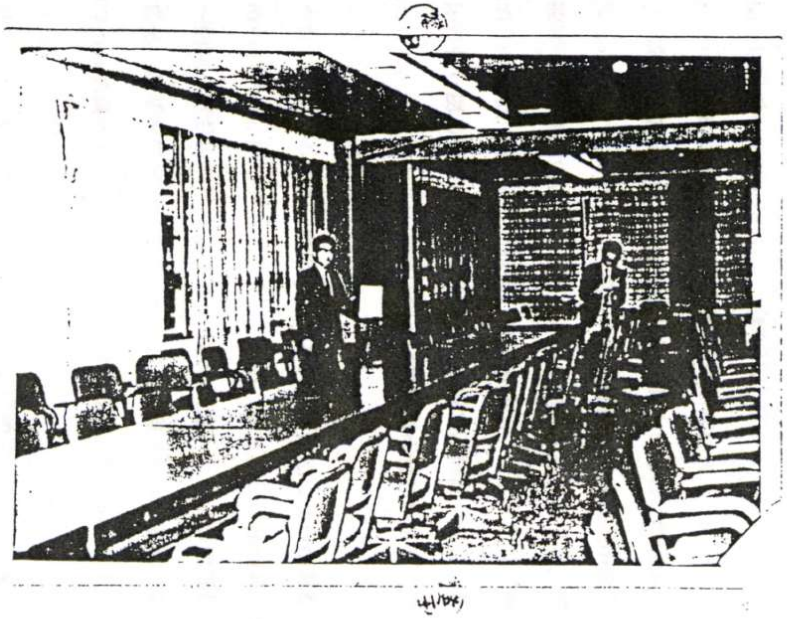
清水「大学闘争を潜って、いま私や松下さん以上に経済的に安定している人に対して信用できない気がする。いつでも自分の生活や生き方を捨てたり、変えたりできることが必要ではないか。」（註ー補充して討論を続けたい、との意思表示があった。…刊行委）

佐々木「それはちがうと思う。」

松下「（清水さんがいいたい趣旨は判るが）ぼく以下の経済レベルの人がいるとして、以下であることは信用する絶対条件にならない。また生活という場合、経済レベルよりは（それを軸の一つとしつつも）生理や幻想の動き、壁へのぶつかり方の総体として把握したい。」（註ー大学闘争以降も、手に職をつけることが全共闘運動の最後の課題だというようないい方で現実の厳しさを強調する人もいるが、それにより自分の突き当たっ

会議室の壁のマジック表現

（69年12月3日の事件に関する警察の現場検証写真）



会議室内部（69年12月3日の事件に関する警察の現場検証写真）

ている壁を隠蔽している場合がある。）

友田「最近も何人かの人に、友田さんは条件がいいですよ。例えば駅前のビルに貸教室を借ていたりしたら、悠長なことをやってられませんよ、というようなニュアンスのことをいわれたが、そういう問題ではないと思いつつも、いっても通じないだろうし、黙ってしまうしかない。」

松下「かれは自分ではいいにくいだろうから、ぼくからいうと、ここは法律的にはかれの私有財産であるとしても、対応する金額を兄弟に支払っているから借家人と同じだ。」

友田「バレてしまったか。実質的には借家人以下だ。」

以前からの松下の提案もあり、全員の同意があったので、神戸大学へ車で向かう。

松下「71年5月のぼくに対する構内立ち入り禁止決定は、まだ撤回されていない。」

（だれかが「機動隊が出てくるかな?」と冗談をいい、笑いとともに緊張感を誘う。69年段階の教養部正門は殆ど使用されている様子がなく、新しく南側に正門や階段が作られ、これは69年段階の事務・管理棟（A棟）の機能が新しく東側にできたE棟に移動したことに対応するのであるが、かつての闘争やバリケードの中枢であったA棟～B棟（とくに一〇九号教室）～それらにはさまれた〈 〉広場は、老化や破損の修理も放置されたまま、ある種の荒廃の底に沈んでいるのが印象的で、ここにも悪夢を忘れたい管理者らの姿勢が感じられる。〈情況への発言〉の掲示板は撤去されている。A棟一階西側にある教授会用の会議室は今は学生用の談話室に「開放」されていることが室外の掲示から判るが、使用されている気配はない。テーブルの上にはうっすらと埃が積もっている。）

松下「これまで何度か使用したことがあるが、学生の姿を見たことがない。使いこなすことのできる主体の未出現ということかも知れないが…」

清水「教授会粉砕闘争をしていた頃には、もっと広く感じたが案外せまいのですね。」

島岡「69年3月1日の時（註－封鎖解除の集会を企画していた学外の共産党幹部をバリケード派が中に連行・監禁したとして、多数の民青の武装集団が奪還に押し寄せ、大学当局者や機動隊も待機していた。）、テーブルのこの位置にマイクを置いて窓の外に解放放送をずっとやっていた。」

佐々木「窓が二重になっていたのに初めて気付いた。教授会を防衛していた頃に工事したのかな。あの頃は窓の外の樹がこんなに繁っていなかったから、湯浅（教養部長）も機動隊の接近がよく見えて心強かっただろう。」

松下「また、ここで集会などをやりましょう。」

（ところどころ磨滅した階段を四階まで登り、A四三〇号（元・松下研究室）の前にくると皆なつかしそうである。ドアの部分は板で遮断され、廊下と同じ塗料をぬってある。しかし、松下が時々ゲリラ的に訪れて表現してきたマジック文字から、この空間の意味は明

確に放射している。〈回覧自由〉と記された封筒がドアであった所の眼の高さの位置に貼付されていて、中には刊行してきたパンフレットや、その情宣の紙片が入っている。）

松下「これまで何度も封筒が破棄〜撤去されてきたが、直後に新しく貼付し、パンフレット、特に〈神戸大学闘争史〉の読者が増えてからは封筒の寿命が長くなった。」（註）

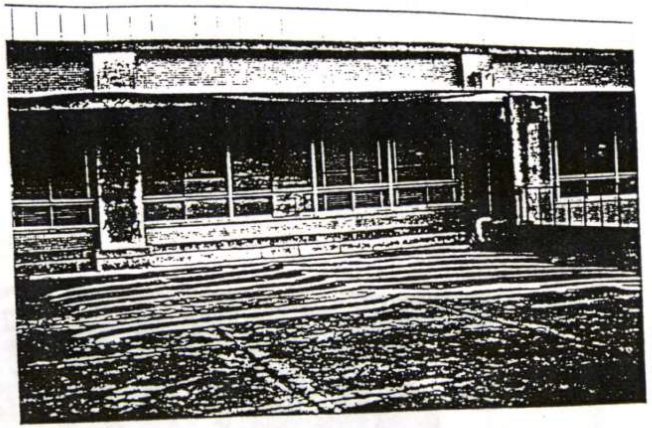
佐々木「ぼくがいま学生なら、こういう不思議な空間を見たり、パンフレットを読んだりしたら、すぐに松下さんに会いに行くが、そういう人はいませんか？」

松下「パンフレットや、その情宣の紙片には連絡先も書いてあるし、住居も近いのに、だれもこない。ただ、80年前後の数年間は第Ⅱ課程の学生諸君が研究室や処分の問題に関心をもち、学生用のロッカーをこの部屋にぎっしりと詰め込んで松下らの〈不法侵入・使用〉を防いでいた事態に抗議し、撤去させたことがある。ベランダの方へ回ってみましょうか。」

清水（ベランダへきてから）「ここへくる途中にすれ違った教官らしい女性が、驚いて松下さんの方をふり返って見送っていましたよ。」

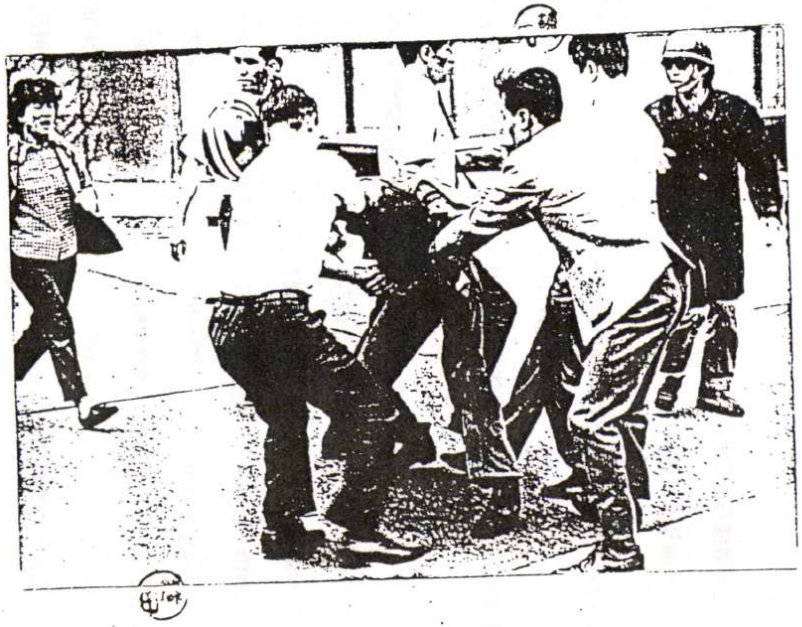
松下「知らない人だが、新しくきた教職員も向こうはぼくを知っていることが多い。」

（註－この封筒ないしドアの下のスキマが連絡用ポストの役割を果たすこともあるが、たんに便宜的なレベル以上の意味が必要とされるのは勿論である。）



（83年10月　札幌から訪れた人が撮影）

（71年9月　告訴により警察官が撮影）



B一〇九教室南側（71年9月7日の事件に関する警察の現場検証写真）

B一〇九教室東側（71年9月7日の事件に関する警察の現場検証写真）

（ベランダ側の窓には中が見えないように塗料がぬってあるが、訪れる人々がこすって塗料をとった跡がいくつかあり、中の様子が一部は判る。木製の椅子や机は松下らが使用していた段階のものではなく、からっぽの本棚と共に、一種の〈舞台装置〉の形式をととのえるために置いた感じがする。）

松下「物理的に入った場合は告訴するという通知が70年代と80年代にきている。再占拠を怖れているためだ。（註－かりに松下らがドアの蝶番の部分を物理的に破壊してドアを内部へ押しても動かないように、ドアに接した床にT字形に丸太を組み合わせて補強したり、窓枠を溶接してあるから、結局、大学側も使用できなくなっている。」

（ベランダ側には数年前から各研究室ごとのエアコンディショナーの室外部品が設置されているが、各部品に記された番号をみると、A四二九からA四三一に跳躍しており、これはA四三〇の使用を大学当局が永続的に放棄した表現でもある。）

松下「ぼくが身体的に消滅するか、この建物をまるごと壊してしまう場合にだれが空間性の意味を伝えていってくれるか、いつも考えている。」（92年10月で教養部は廃止され、国際文化学部になる。）

（ベランダの北端と南端から包囲するように打ち寄せているn重の（（（……））））の白ペンキ表現の上を歩きながら）

松下「これは、空〜宇宙からも見えるように描かれたのです。」（註－69年の二〜八月にはベランダの全体に机と椅子で複雑に構成したバリケードがあり、迷路のように入り組んだスキマを時々這ったりして出入りするのはなかなか楽しかった。」

（ベランダの西端から＜　＞広場を見下ろしながら）

松下「69年9月の授業再開を粉砕する闘争の過程で白ペンキで書いた巨大な＜　＞の一部がまだ残っている。」

（B一〇九号教室へ歩く途中で）

佐々木「20年以上も臨戦態勢を持続できるエネルギーはどこからくるのかなあ…」

松下「散歩の気分でやっているから続くのでしょう。」

（B一〇九号教室の番号はB一一〇号に変わっているが、70年代の中期に教室の外の東の壁の白ペンキで書かれた〈諸君暴虐を忘れるな〉の文字は、はっきり残っている。飢餓群団として積極的に71年のB一〇九闘争に関わった島岡、清水の二人は特に感慨深く室内を見ているが、ちょうど授業中の学生らには、変な中年の学外者が数人うろついているとしか見えなかったかも知れない。教職員が排除しに来れば判断材料ができたであろうが、かれらは、遠くで警戒していたとしても、この日には直接には姿を見せなかった。）

（たんぽぽが数本咲いている＜　＞広場を通り、A棟西の斜面を降りながら）

佐々木「69年2月には、ここにまずバリケードを作った。その後、どんどん前方へ増えていった。」

清水「その頃、夜に歩道橋を渡って教養部へ歩いてきた時、A棟の屋上から橋本君が大きい声で、清水さん！と呼びかけてきたことを今でもはっきり覚えている。」

〒657

神戸市灘区赤松町1-1

松下　昇　　様　　様
B109-110

平成　4年　4月　20日

六甲カトリック教会墓地委員会

墓地管理費について

六甲ｶﾄﾘｯｸ 教会墓地規則第５条に基き、平成４年度分(1月－12月) 墓地管理費を下記の通りご納入下さいますよう請求致します。

記

1．金　　額　　4,000 円

（ 但し巾1 米につき年額2,000 円）

1．納　　期　　平成　4年　6月　30日まで

1．納入方法　　同封の銀行振込用紙で銀行へお振込み下さい。　銀行振込用紙に添付の受領証は当教会墓地委員会の領収証に代用致しますからご了承願います。

御　注　意　　平成3 年度よりお願い申し上げましたように、翌年度以降分合算納入は整理の都合上お断り致しております(翌年以降分又は請求額以上納入の場合は今後献金として処理させて頂きます）ので御注意下さい。尚同封振込用紙ご使用の場合送金料は無料です。

管理費は、共同で使うところに主として使用されます。(道路、階段、石垣の清掃整備、大きい道路にあるごみかごの処理、お墓参り前の清掃などです)
所有の墓地周辺の清掃をよろしくお願いします、特にまだ墓石を設置されていない所は雑草が繁ることが多いので処理をよろしくお願いします。
六甲ｶﾄﾘｯｸ 教会墓地がいつも手入れされていて、先祖の霊が安らかに　憩われるのに　ふさわしい場所であります様に皆様の御協力をお願いします。

（71年10月　神戸拘置所の近くで松下の友人のだれかが撮影した松下まやと清水さん）

（友田氏は仕事の都合で先に帰る。後の四人は歩道橋を渡り、学生会館前の芝生（註ー70～71年段階に裁判闘争の救対費用を得るために、ここで古本市をしたこともある。）を眺めつつ、工学部横のあまり人通りのない松下専用の？斜面の道を降りて行く。）

松下「いつもは一人でトボトボ帰るが、今日は一緒に話しながら帰れるのでうれしい。69～70年の授業粉砕闘争の頃、いつも教室の黒板消しを何個か持ち帰り、このあたりの谷間に投げ込んだので、貝塚ならぬ黒板消し塚になっているだろう。」

（崖下にある松下の住居で休憩。ちょうど松下まや（66年生まれ）が京都の下宿からもどってきていたので、あいさつに出て来ると皆は以前の面影が残っていると大喜び。73年6月の家宅捜索の時に小学生のまやのカバンにとっさに重要書類を入れて警官の間から送り出したエピソードや、70年に生まれた未宇が言語表現などの障害のために学校へ行けないことも予測し、生涯的な教室ないし遊戯室として73年にかなり無理をして（カンパにも支えられつつ）それまでの狭い住居からやや広いこの住居へ移った（ガケ崩れで付近に死者がでたこともあり、家賃も安かった。）が、76年の突然の死で、より不確定かつ本質的な教室ないし遊戯室になっていることなどを松下から語る。なお、松下のはいているスリッパには目印に＜＞がマジックで記してあることを示すと全員爆笑。

夕方の六時を過ぎたので、神戸大学経由の四人は歩いて駅の傍の、以前利用したことのある食堂に入る。経営者は変っているが、値段の安さは変っていない。）

清水「69年1月の東大安田砦の攻防戦を、ここで食事している時にテレビのニュースで見て、食事がのどを通らなくなった。」

松下「その後の数年を経て、六甲空間の戦いこそがテレビにうつる闘争よりも本格的であることが明らかになってきたが、これはすでに60年代中期から予測していたことでもある。また、ここにいる人を含めて六甲空間の闘争を潜った人は全てどこへ行こうと、それぞれの六甲空間性を深化させていると思う。ぼくは未宇が眠る六甲の斜面を離れるわけにはいかないが…。未宇が眠る墓地は、清水さんが自分の責任で（発行が困難になった）『神戸大学闘争史』（仮題）の数十人の講読予約金を転用・委託してくれたものを使用料の一部にした。墓地の番号は偶然にもB一〇九が空いていた。人間をこえる何かの力が働いたのかも知れないが…。墓石は建てない。巨岩・油コブシを含む六甲山系の総体が墓というより闘争持続のバリケードだから。なお、油コブシは、超古代の言語では＜宇宙の港＞という意味がある。宇宙性のテーマには概念集を読んでもらっても判るように以前から深い関心がある。空間としての宇宙論と、どんなささやかな波動からも全宇宙の関係の発見～転倒の手掛かりを得ていくという双方の根拠からであるが…」

（註ー前記の清水さんの提起は、かの女の最高の表現の一つであり、次ページ参照。また、既成の学問～秩序の体系からは異端視されている宇宙論の資料については刊行委から回覧可能である。）

前略。

私は、五年前、一九七一年、仮題「神戸大学闘争史」発行委員会のメンバーの一人でした。あなたは、その年の暮、発行予定の「闘争史」の購読予約をして下さいました。覚えておられますか？

当時、神戸大学内は、告発し、異議申立てつづける斗いのエネルギーと良心を抑圧し、正常化へと収束さい、いつわりの平穏さが支配し始めていました。

私たちは、「闘争史」を編集し、発行していく過程そのものをも、ひとつの運動として、自他ともに問いかけたいと思い、「発行運動を問うために」というパンフレットを発行しています。ナンバー3まで作られました。しかし、それ以後、「闘争史」発行委員会は、共同作業として、機能しえなくなりました。それには、いくつかの理由があり、それについて私自身のいくつかの反省があります。そして、現在、その反省をかつての発行委員会のメンバーと共同で話し合える条件も、ありません。

にもかかわらず、当時、購読の予約をして下さった方々（三十一人）の予約金（三万一千円）を私が、保管しています。五年間、何をつなぎとめ、何をひき延ばしているのかわからない「三万一千円」のお金を、どうするのが一番いいのか分らないままでした。

ところが、今年四月、このように、私に書かせる、大きな契機がありました。

神大斗争のまっただ中で、一九七〇年二月二日誕生した、松下昇氏の長男の李子ちゃんが、今年四月九日、亡くなりました。

斗いの中で、受胎し、誕生した李子ちゃんの存在は、象徴的な意味をもっていました。彼は、六年間、ひとことの言葉も発せず、亡くなりました。

私には、彼の死が、自分に対するひとつの罰のような気がしています。

彼を生きのびらせるために、何ひとつ為さなかったこと ……

かつての共同性を死なせてしまったこと ……

五年間、なす術なく、思っていたものへの罰 ……。

彼の死が、私にこのようにすることを告げているのだという気がします。

あなたから、おあずかりしている千円を、私は李子ちゃんのお墓の一部にしてほしいと思います。共同の条件がない今、これは、全く私の一存であり、私が全ての責任を負います。

同封のハがきでぜひ、お返事を下さい。

五年前の住所ですので、移られた人も多数おられるだろうと心配です。何人の方々にこれが届くか分りません。この封書が戻ってきたり、お返事のない場合は、私の判断に任せさせていただきます。六月までにお返事をお願いします。

一九七六年 五月一六日

神戸市灘区桜口町一丁目一十二 ひかり荘
清水 早子
TEL (811) 7044

〈呼びかけ〉

神戸大学闘争史発行委員会

＊＊＊　＊＊＊

わたしたちは、神戸大学闘争史（仮題）を、編集発行したいと考えます。

第一に、国家権力、大学当局は、出すこと自身が反革命である「総括」を現実のものとしてきており、この歪曲でしかないものに、わたしたち闘争者の未来に関わる〈総括〉を対置、越えるという火急の要請があります。これらのことは、松下昇氏の処分、8・7公判を頂点とする神大斗争裁判などの策動がその現われであり、国家権力、大学当局は、神大斗争を彼らにおいて「なかったもの」とすることによって、わたしたちにそれへの暴力的同意を強制しようとしています。

第二に、わたしたち闘争者自身において、神大斗争の共同的総括がなされず、拡散の必然に身をまかせており、にもかかわらず、未来へ関わる〈総括〉が萌芽的に内部に胎動しており、これを共同的なものに転化し、顕在化させるための媒介的素材および七〇年代闘争への課題を基礎的に問う場が必要とされています。

第三に、わたしたち闘争者全てが各々の〈総括〉を表現すべきであると考えます。わたしたちはわたしたちの〈総括〉を別個に表現する作業を現実化します。

第四に、全学的なあるいは全人民的な共同作業はただちには不可能であり、にもかかわらず、火急の要請があるということにより、この共同的作業の端初にでもなればいいと考えています。

第五に、したがって、編集の基本方針はビラ等の〈表現〉の可能な限りの全体的集録および、大衆的討論による総括の基本的視点の共同的提出のみに止め、資料集としての性格を基本としたいと考えます。

＊＊＊　＊＊＊

①資料編集方針を総体的なものとするために、多くの闘争者が編集への参加を呼びかけます。

②総括の基本的視点を共同的に提出するための大衆的討論、11月10日（予定）の集会を呼びかけます。

③斗争を発端とし、七〇年六月斗争に至るまでの、全過程で出された全ゆる諸個人、諸集団の〈表現〉を全て募集します。　㋑ビラ　㋺機関紙　㋩討議資料　㋥総括パンフ　㋭写真　㋬ラクガキの採録　㋣その他

④資料の提出先および発行委員会への連絡先への

学生会館四階「展望」の部屋です。その際、提出者の氏名、連絡先を明記した袋に入れて備えつけのダンボール箱に入れておいて下さい。なお資料は返却します。

⑤第一次資料約、検討の会議を、11月4日(水)　3時、「展望」の部屋で行います。

予約購読の御案内

心苦しくも、また冷酷にも時は休むことなく流れてゆきます。そして、流れゆく六甲の時間の中に、呼びおこすには心が痛み、忘れ去ろうにも消えがたい鮮明な傷をもつわたしたちの時間が、行き場もなくとまどつています。

一九六八年〜一九六九年〜いまとひとつのエポックを形成した神戸大学闘争の問いかけを、完全に切解しうるのは、まだ遠い未来の時間の中でかも知れないけれど、あの暗いエポックはまぎれもなく、あなたの、わたしの、わたしたちの実存を位置させた時間であつたのです。

わたしたち発行委員は−実は、神大闘争と呼ばれる時間に肯定的にも否定的にもささやかなこだわりを持つ人の全てが〈発行委員〉であるのだけれど−各々が持ち続けるこだわりを未来に飛翔させることを希望して共同の作業を開始しました。人材的にも、財政的にも限界をかくせません。また、闘争の過程で為された諸表現行為は、「書かれたものの領域」を突破して生きたものであり、それら諸表現行為の歴史を文章化し「書かれたものの領域」におしこめようとする逆倒した意味を伴なつてしまうことも否めません。であるから、わたしたちは、でき上つた結果を「これが神大闘争の正しい歴史であつた」など決して断言できないことを確認しています。何より作業の過程で、「闘争史」とは何なのかを問うてゆくことこそが重要であり、どのように熟慮と精力をそそぎこもうとも、決して「総体」たりえない、「全体」たりえない、「正史」たりえないのだ、そうあつてはいけないのだという不可能性にのみ確執するのであり、むしろ文章の行間や背後で黙示するものを凝視する想像力の真摯さと逞しさが問われることを確認しています。あなたを含めた〈発行委員〉が持ちつづけるこだわりに呼応する〈ひとこと〉を発見することができることを希望しています。

作業の過程を共有しえないという溝はやはり大きいけれども、いえ、だからこそ、作業の過程への批判的な関わりを期待しながら、仮題「神大闘争史」を一説されるよう呼びかけたいと思います。

なお、編集は、神大闘争の過程や関連するところで出されたいろいろな種類のビラ、張り紙、パンフレット、ノート、落書、写真、書簡等を中心におこない、また神大闘争と「闘争史」発行をめぐつての討論会をおこない、その内容を収録する予定です。

読者は、B五版、約百頁、三百部予定価格千円（送料等雑費は含まない）となつています。限定千五百部、本年六月発行の予定ですのでぜひ、早目に予約されるよう呼びかけます。

仮題「神戸大学闘争史」発行委員会
神戸市灘区一王山町神戸大学学生会館
学生会館事務室気付
「展望」発行委員宛内　内線二〇五五

切り取り線

仮題「神戸大学闘争史」予約購読申込書

仮題「神戸大学闘争史（予定価格一〇〇〇円、（但し、送料等は含まない）
の予約を申し込みます。

氏　名　　印

史誌受取り住所

切り取り線

受取書

仮題「神戸大学闘争史」の予約購読料として一〇〇〇円（但し、送料等は含まない）を確かに受取りました。

仮題「神戸大学闘争史」発行委員会　印

殿

〈闘争史〉発行運動を問う為に

――その1――

仮題神戸大学斗争史発行委員会

闘争史とは何だ、を問うて進む過程こそが大切であると考えるわたしたちは、発行をめぐる実践的論争を全体的な流れとしてゆくべく、わたしたちがこれまで為してきた討論の内容をまとめることで問題提起をしたいと思います。

（尚、このパンフは、討論の再現ではなく、内容をまとめ、かつ参加した諸個人の総体で、ひとつのキャラクターを構成しているように編集してあります。）

一月二八日現在の、討論参加者あるいは仮称編集者

田崎光雄　佐々木英一
清水早子　松下　昇
横尾正信　飯塚
橋本和義　岡野　清
＋αβγ…

（発言順ではありません！）

A　斗争史を発行する動機についてだけど、まず、諸々の公判斗争などへの資料ということがあると思うんだ。つまり・かつての事実をめぐって国家権力などとの緊張を強いられているという直接的仮家にある者の問題ないけだよ。このことは、別に被告でなくたってその事実をめぐる思想性において、内的に問われていることなわけだけど、ともあれ被告はこれから逃げたくても逃げられないという直接性をもっているわけ。どうしても国家権力などから総括を強いられるのだけど、このことをなんとか逆手にとることはできないかという発想が、ぼくにはあるんだ。

B　斗争史の発刊に対する私個人の関わりを述べるのに感慨を感じてしまう。言い切る事によって自己を規定し、拘束してしまいそうな不安と、（どうせどう言い表わしたところで表わし得るものではなし）中途半端な嘘をすくしたてそうな恐れ。それをもて余したと仮定して続けてみよう。〃自分にとって神大斗争とは何であったのか〃と誰かから問われ、或いは自問してみても何も出てこはしない。ムキになって考えれば考えるほど。というよりは私の中ではムキになって考えることに対する拒否反応めいたものがある。もちろんそれは語ることのしんどさも含めないのだが「神大斗争」などと言葉を言い表わすものから中で沉潜し始めていると感ずるからなのだ。それは、二年間というものを私の中へ投影することで、現実としてあった二年間を、その現実を取り払った後にこそ存在しうるものを掴み取ろうとしているからなのかもしれない。もし〃斗争史〃なるものがあるとすれば、僕にとってはそれは例えば「バリケードの和築」とか「国交の経過」或いは「マターリニストとの衝突」等々の羅列としてはあり得ず、そのような事実関係からは一定離れながら、なおかつ消えうとして消えうにも消えぬ〃私の感覚〃を感覚としてそのまま存在させうるものに違いない。

C　無期限バリスト中に入学した、私（たち）21回生にとって神大斗争は課題のみ多く、条件に乏しい斗いであったように思います。試行錯誤を重ねながら進んできた、私（たち）にとって現在の自分の位置を明確にするために、自分の過去を今一度ふりかえる必要を感じるのです。それ

は、また同時に、権力による歴史の偽造に対して、私（たち）の事実性を対峙させることにつながるでしょう。

D　まず、なぜ編集・発行するのかということがあると思いますが、先ほども言われたように、契機としては、当局との関係や弾圧状況との関係で火急の要請があるからということもあるかも知れないけれど、本質的には、細々とした過去の部分的な蓄積＝自己史を未来に向けて対象化する際、他者及び他領域の蓄積とぶつかり合わせて、過程を総体化させたいということがひとつあると思うのです。

A　われわれ内部に闘いの思想性を清算してゆく傾向が拡大しているという反革命についてなわけだけど、このことは大切だと思うんだ。拡散していかざるをえない以上、拡散してゆくことはいいと思う。でも、拡散するということの内容だヨ。情勢が変ったから、もう全共闘運動は終ったというような発想が問題なわけ。強いられた拡散を、どうこっち側からの拡散に転化するのかという作業が絶対必要だと思うわけョ。そういう意味での総括と方針の、せめて素材としてでも何かが表現されることがさ。といっても個々人の現在の生き方が、総括であり方針であるわけど

「まャ、放っといてくれや、おれはおれでやるから、おまえはおまえでやれ」というだけではダメだと思うんだ。どこかで相互批判する場をもちたいとぼくは思う。

D　けれども、できあがるだろうものの総体を、「これが神大斗争の歴史であった」という形で言ってしまうとえれば、あまりに多くの危険性をもってしまうし、むしろ犯罪的でさえあり、どうあろうと出来上ったものは絶対に「総体」たりえない、「全体」たりえないという不可能性に確認するという、「自己史」と「総体史」との緊張関係を孕んでいなければならないと思います。それから、必然的に表われる資料的・事実史的側面の背後にどれ程迫りうるかという事が重要な問題なんだけど、その「背後」には、おおざっぱに言うと三つに分けられると思うけれど、ひとつには、学内外を問わず、闘争と無縁に生きようとした世界があり、ふたつには、さっき言われた党派のビラ等の様に先行した政治の背後に隠されていた斗争主体の内的な問題があり、みっつには、同じ斗争の世界で生きたにも拘らず、ある部分をピックアップして浮上させることによって忘れ去られこぼれ落ちる部分がある事です。

E　当局も「総斗史」なるものを出すつもりらしい。彼等は、例えば金銭的にも何ひとつ苦労はないし、「これこそは正しい記録である」と言わんばかりにデッカイ面で出す訳だが、出された本が、僕等と文体が違い、表現方法や、事実関係が違うというのでは決定的に不充分である。僕等は、「闘争史」を出すのが否か、何故今さらながら出すのか、言わば、出発点からの徹底的な討論から掘り起こすし、「闘争史」を出すことを一つの運動として、全共闘運動に加った者、敵対した者をも含めて、自分自身の自己史の再点検と自己史から総体史への発展を目指して、生活へ組込ませていかなければ意味がないだろうと思う。歴史を生かすのか、私物化し汚点として消し去るのかの明確な違いが過程の中に織込まれ、出来上った本が「斗争史」なのではなくして、発行の過程こそを「斗争史」としていきたいと思う。

E　神大斗争を、単に、政治的な位相で展開してゆくのではなくて、その様な表層をめくりとってしまったところに存在する闘いの根っこをも言うべき部分をさらけ出してゆくこと、そうすることによってしか、へ斗争の発展・進歩とは何かへと言う基本問題を明らかにすることは出来ないと思う。我々が取り組むのは、過去の斗いの記念としてではもちろんないし、冠頭徹是我々の未来の為だ。我々の手にしているものは、余りにも少なく、かつ部分的であるから、へかくあるべきだへという高みから取り組んでも、挫折するだけで、要は、この極小部分的なへ手駒へをどれだけ、我々の未来に生かしうるのか、すなわち、現在→未来へ現在→過去ではなくへという思考法で取り組んでゆくべきだと思う。

G　自分だけではなく、ビラ相互の関連性ということも考えて立体化をめざすことが必要ですね。「資料集」を出すということではなく、「資料集とは何か」を問うものとして出すことです。過去の整理でなく、未来性への媒介とするという事も。私個人は、小説も書けない詩も書けない書かない、けれども様々なはずから書かざるを得なくてビラを書く。表現の不可能性の問題とかこの表現の問題とかこの在ることを対象化したい。また権力からの事実歪曲に対して

対して我々の事実性を提起するということも求められます。

H　ビラとは一体何だったのか…を考えてみる必要があると思うんダ。我々の出してきたビラ……特に党派が出したビラは果して本音が出ていたのか……それは明確に主としかいえないようがなかったネ、わずかにそれを大衆組織宣で出したり色々な努力をすることで僕自身は闘争への人間的なかかわりを表現していたように思うんだけど。言ってみれば精神の暗部を行為で乗り切っていく事を我々は当然の事として当時は受け取っていたと思う。だから、当局の出した「闘争史」の事実性と対決して我々の事実性を主張する時、単にビラの羅列の中では如らと同列の位置にしかいないのではないか……と思うんだけれど。その意味でこんなエピソードがあったんだ。僕は闘争末期に偶然の社会で、ある音楽サークルの社会新聞を読んだことがある。……その中で……これはたぶんサークル部員間で神大闘争について討論した速記録だと思うんだが……一部員がこう語っている。バリケードが大学になかった時、彼は何の気がねもなくギターのケースをキャンパスに持って行ったが、今ではそれがどうも出来ない。他の学生の眼が気になる…… と言っているんだ。この言葉は重要だと思う。闘争学園闘争はこんな風に闘争とは全く無縁だと思っている学生にまで彼の深部の意識構造に肉迫する問いかけをなしたんではないのだろうか。この言葉を吐いた学生がその後どうしたか判らない。彼がこのように悩みながらなおかつ闘争に加わらなかったとしたら……ここが大切なんだが……なぜ参加しなかったのか、いや出来なかったのか僕らは闘争史を編集する場合この原因を未来性を展望する中でつきとめなければならないと思うんだ。蜂起の原基を探る姿勢……それは、過去の歴史を憧憬的に語る姿勢から脱却して、自己史の最も暗黒な部分を切開し、それを媒介として未来的展望を語る中にのみ見出されると思うんだ。それが本当の意味での革命の本質史となるだろう。すなわち編集行為を現在の闘争の場と考えて単に学園闘争を総括するのではなく、その死滅を宣言出来るだけの編集方針が必要となるだろうと思うんだ。

G　……ビラからだけでなく、つぶやき、表現を現在の日付から照射することが必要だと思います。4次元の福造のものを2次元の平面で掴こうとする無理がありますね。……「資料」という概念を転倒するのにはいい社会だと思います。これから本当の資料が作り出されるんだという意味で。比喩的に言って、ここにある集物があるとすれば、そのヘタを切りとり2次元の断面を提出しているのが当局の資料集で、我々はこれを克服しなければならないと思います。……それから、名人が「資料集」と「自己史」の対象化の二重の作業を並行してやる必要があります。……あっそれから、ラクガキの収録はできないわけですね。ビラなどにもコメントあるいは文章をつけるようにすればいいですね。

D　でき上った編集はどちらかと言えば、未来への足場として捉り去られるべきもので、私たちはむしろその過程を無駄にしなければならないのだから、現在の地平と未来への考え方を多くの人に問いつめるような形で、この発行委員会にブッて闘争活動なり討論をやらないとだめですね。それから、さっき言われたラクガキの収録のことについてちょっと思ったんですが、ラクガキを始め闘争の中での諸々の表現行為はむしろ「製本」の領域を飛び出して拡がっていったのであり、それらを「製本」として集録しようとしてもどうしようもない。逆倒した意味をもってしまうということです。たとえば、ラクガキは、自室に書いてのみ書く人はラクガキに生命を吹きこむことができたのであり、ラクガキ自身は呼吸しえたのだと思うのです。だから、この発行の作業を死骸の寄せあつめではなく、未来への新しい生命誕生への胎水にしたいですね。

A　結局、出来事とか、それらの書かれたものとかの間にあるものをどう想像してゆくのかということが問い返されてゆくわけヨ。このことが、ぼくらの内実を表現し、それだけでは終らず、共同的なものに媒介されるということだと思う。だから、もっと言うと、事実史と思想史という問題がわけだけど、前提的に、われわれの思想性が、何ものとはいえ、この思想性が、闘争史の内で、どのように育まれてきたのかということは、具体的な関係とい

か、斗争総体の実践的な構造が把えられた上で、その関係、構造に対決する中で、どのように思想性（まり魂が捻れたかという問い方をしないとだめだと思う。資料だから事実が必要だということではないし、思想的に総括したからいいということでは実践の具体的媒介というものが捨象されるから、結局、ぼくらの未来へどう切り込むかということへ転化しないと思う。魂を忘れた上に未来はないわけだヨ。

……オワリ……

広告？

○編集参加者募集
年令、性別、学歴、職業、経験、一切不問
批判的に参加する人歓迎　給料？？？

○資料提供求ム
ビラ、ラクガキ、写真、クラス・サークルのノート、メモ、（四三年十二月～四五年夏ごろ）

○賛金カンパ協賛いろいろ

○予約購読者募集　発刊予定六月

仮題「斗争史」発刊資金（のささやかな一部）獲保のための映画会のお知らせ

第1回　2月5日（金）　11じ～3じ～　学館ホール

（ルネ・クレマン第1回監督作品　鉄道の斗い
主演　高倉健　続・網走番外地

第2回　予定

（ルネ・クレマンシリーズ第2弾　海の牙
羽仁進　監督　愛奴

¥150（整理券）　共催／六甲映像研究会

チケット発売中　学館1階「展望」BOX or C校舎研究室

〈闘争史〉発行運動を問う為に

――その2――

仮題「神戸大学闘争史」発行委員会

第一別 一九七二・四・六

闘争史とは何かを問うてゆく過程こそが大切であると考えるわたしたちは、発行をめぐる実践的論争を全体的な流れとしてゆくべく、わたしたちがこれまで為してきた討論の内容をまとめることで問題提起をしたいと思います。

（討論参加者 αβγ……
執筆者 岡野清、佐々木葉二、清水豆子、橋本和義
松下昇、）

このへその2〉のパンフはへその1〉発行後、つきあたった問題点について討論を重ね、その内容を分担して執筆したものです。なお、岡野氏のビラはクラスの友人に向け書かれたもので、松下氏のビラは風に乗って現われたものでその限りではありません。

……

手で綴る
手紙を書こう
掌が時(たま)に白いっぱいになっても
一生かかっても完成しないのを

……

誰にでも良い
手紙を書こう
長い 長い手紙
一生かかっても読み終らない

……

美く面したてめえらへの呪い
ねいよ たとえ 狂ったとしても
呪い ごいだけは のこせよ
でなければ 生きられない

永山則夫の才三分冊のノートの詩より抜粋

ビラの転載をめぐって――いくつかの問題点

私たち〈発行者〉は、当新聞をなかった具体的な、深い意味をもって問いの数々に今、めぐり合わせている。あるいは、その予測は可能であったにせよ、豊かな質を成熟させる伸びしろいまだの深い予感と問題点は、内容的な問題意識の高まりと外からの問題提起との絡まりのなかでしか育たない。だからこそ、『「神大斗手史」発行運動を問う』にNO.1のパンフの中で、私たちのそれぞれが「一冊の出版物発行をもっての定着を、ではなく、それに至る過程でどれ程の問題をひきだし成熟させるかこそを、」というような問題の確認をしたのであった。

現在、私たちが抱えている問題の焦点は、ひとつにはビラの転載をめぐってであり、ふたつには出版にともなう資金の問題をめぐってである。いずれも、本質的には「出版とは何なのか」を問いつづけることなのだが、契機としてあったのは、過去に自分が書いたビラ等の表現を、私たちが発行しようとする機関「斗手史」に掲載しないで欲しいという幾つかの意志表明に出会ったことである。

私たちが手にしている時間的に最も古いビラは、おおよそ四年前のビラであるが、この四年の時間は、多くの人間の生き方の変移を視ている。だから私たちは、集積されている多くのビラを手にするとき、それが書かれ撒かれた当時の生命力に決してなびもつかない変形されたビラの意味に、戸惑うことがある。それは、表現の二回性につきまとう宿命であるかも知れない。けれど、私(たち)は、それ自体の中に意味性を見出すより、それを媒介として展開するものに目を遮らそうとするのだ。

NO.1

ビラの転載を拒絶する意志表明は、あるものは全面拒否であったり、あるものは条件つきであったり曖昧でしかも多くは着信した形で表明されている。その二つをめぐって私たちは何度か討論を重ねてきたが、掲載者の方針という立場で、ビラを書いた人の転載についての話合を受けとり、載せるか載せないかと処理してしまうことのできないあまりに深い意味がそこには胎まれている。私たちも過去に幾枚かのビラを書いてきたのであり、そこで問いかけているこ

とは全く私たち〈発行者〉自身の問題であり、ビラに限らず全ての表現活動をわこうとする人々に問いかけているのである。そして、討論の過程で私たちは「拒否の意志をだいたい次の三つのあり様として把えた。①には、過去の自分に誠実でありたくないという清算主義的な傾向であり、②には、この「関手史」発行運動に対してトータルにも部分的にも批判的視点をもっていて主体的に参加したいという傾向であり、③には、ビラ等を書いた時点と現在の自己の連関を対象化しきれない自己きれない不安さが拒絶させるという傾向である。しかし、これらは分化したものではなく錯綜しているだろうし、④として、いずれでもない理由があるだろう。しかし、私たちとの絡みあいの中で、すでに、①の人々清算しようとしてすれ違うものに迫られ、拒否せざるをえないであろうということで、②の場合には、私たちと批判的に交流しながら同時の作業をすることで、③の場合には、不安さに向い合うことで対象化の入口に立たされているということで、……彼らは仮装した〈発行者〉として登場している。その上で、私たちに問いかけてくるものは何なのか。ビラはすでに撒くという行為の過程で彼(ゼ)自身の私物ではなくなり遠くまで行ってしまうというだけでは、問題は貧しすぎる。いちばんには、ビラに書かれた内容の個別性＝独自性と、書き撒くという行為の過程で書き手を離れて遠くまで歩きだすという普遍性との間の矛盾をどこまでひきうけたか、ひきうける力ということが問いかけてくる。ふたつには、書いた主体を大切にするということとの内容は、彼(ゼ)の現在の立場を大切にするということではなく、その主体の全過程を問題にすることであり、清算することなく、現在までの過程の総括としての現在の立場を明示しなくてはならない。三つには、自分が書いたビラにはいろいろな想いをこめ、その掲載転載を拒否するとき切れるけれども、果たして他の人の書いたビラに対して自分はそれだけの同じ事をもって取り扱ってきたと言い切れるだろうか。このことは最初のビラの内容の個別性と行為の普遍性との矛盾をどこまでひきうけたかということに関連する。四つめには次のような問題がある。一人の人が一枚のビラを書くにさるにはそれに絡み合うのっぴきならぬ

NO.2

い限界があり、まだ一枚のビラと切り離すことのできない関係でつながっていることがある。私たちが集められた数枚のビラを扱うとき、私たちはどのような系を形成し私たちに何を訴えるのかを知らない。このように断ち切ることが一人の人には許されないことを私たちがあえて行なうことの罪は一体どうなるのだろうか。しかし、逆に、今まで誰にも視えなかった系を私たちが発見することがあり、このことの評価は一体どうなるのだろうか。決して一くくりにすることのできない、私たち自身で語ることのない、なぜ？の問題である。五つめには、このようになお残り続ける問題や、私たちが〈発行者〉となってしまったために背負うものを、問い続けると同時に、私たちは、あなたは何故〈発行者〉ではないのか、私たちが誰に抵抗する、またはそれ以上の批判たる作業を続けているか、どのように別個の作業が共闘しうるか、を問い続けるだろう。

（直接言をめぐる問題は次回に提起したいと思っています。）

5. このパンフ作成と同時に私たちはオーストラリアップ済みのビラの一覧表を作成しています。両方を全ゆるビラの書きまに発送し、私たちの問いかけと彼らのあなたの問いかけを交差させる場を創り出し討論を展開したいと思っています。

構成をめぐる問い、その他

さ、なぜ、〈闘争史〉を発行するのか、という問いは、いま、迄大なまでに迫ってきている。確かに、わたしたちはかつての闘争に眼を向けているように見える。そのことがいういうなくに、いくつかの根深いこだわりを感じさせてしまっているのである。もちろん、わたしたちにも、いどいなかしさと執着心がかもしだす憂さしさのようなものがある。しかも、こだわりは、〈闘争史〉それ自身にのみでなく、闘争そのものに対する確執にまで達しているのである。つまり、このことは、わたしたちが当初から、ただぼうげではあるが考えていたように、〈闘争史〉発行運動が、闘争を越えたものに、したがって、ひとつの問題になってきているということである。わたしたちは、なぜ、〈闘争史〉発行運動をするのか、ということを、①自分の生きて闘ってきた過程の意味を、いま一歩深く深い領域と共同性の中で再発見し、深化させる。②闘争者の思想性とでもいうべきものが、どのような具体的な構造、諸条件の中でこれとどのように関わりながら培われてきたのかをさぐる。

③表現の既成性とでも言うべきものが、自己解体し、その根拠への問いに至ってゆき、そのことで幻想性の密度を増してゆくという構造と意味を問いただしてゆく。という二と目指す方向で考えていた。けれど、というよりしたがって、もはや、わたしたちの現在の〈生きる〉問題そのものが、これらの問いの答えではないか、というひとめぐり媒介された直接性の内に、わたしたちが居ることにこそ、全この困難はあるのだ。わたしたちは、誰に向って〈闘争史〉発行運動を投げかけようとするのか、という共同性に関する問いがなお残るのである。わたしたちの問いの貧しさをなお問うとするのは、そこにもかかわらずある根拠性があるという確信に基づくのだが、だが、それをどこへ投げかけようとするのか。拡散してゆくもの、いなむしろ拡散しようのないなにかに向ってである。それを見出すことにこそ問いの全てはあるはずだ。

注　〈闘争史〉という志向は、はじめから逆倒している。文字で書かれたものという既成性を解体して問いかけられ

こういった表現を、書かれたものへと再び討じこめることなどのように、問いの直接的真実から最も遠いものであるからだ。だからこそ、〈闘争史〉はむしろ、自己解体をめざす資料集とでも呼ばれるだろう。そう呼びうるのか、いなかが時間の別ハ目である。「まり、生まれるということが死滅へ向うことであるような内的な予盲、二の予盲の意つまりようこそが問われている。何物かであり つつ何物かでないようなものとしてこそ、〈闘争史〉の複眼化ー立体化を志向する。あるいとつのテーマで〈闘争〉を切り取ることを指摘する。わたしたちは直接的には〈拡大闘争〉のいくつかのエポックで集中して現われたものを抽出して、にもかかわらず、二れを越えて、①社会的構造性を媒介として結ばれる他者に対する幻想性がどのように解体していったのか。(〈呼びかけ〉をめぐる変容とは?) ②既成の幻想性の解体に抗してどのように自己の内的な世界が培われていったのか、さらにこの自己幻想がまた物象化してゆく構造などのような根拠を持っているのか、(〈バリケード的なものとは?) ③解体してゆく幻想性と内的な幻想との接点がどのように暴力的なものを生み出すのか、(cf. 暴力の死滅とは?) ④幻想性の密度が増してゆくことが、どのような生活を根拠づけていったのか、(〈帝大粉砕の直辺とは?) として、構成上のテーマを設定していった。だが、結局二れらはまさに同一の内容である。にもかかわらず、複眼たりうるのは、〈問い〉の過程は、二れらが分化していたものが統合化されてゆく過程であったと言いうるからである。このように、一見どうでもいいような、任意に見えるテーマを選ぶことによって、わたしたちは、自己解体を志向するのである。

だが、しかし、わたしたちは、いくつかの共同性の想像的場で〈闘争史〉に関わっているという特殊性を越えられない。わたしたちが〈問いの総体性〉と〈自己史〉との緊張関係の只中で、本質的な政治性の内実を問わうとする以上、このことに直接であろうとするならば、つまり、〈闘争史〉の複眼化ー立体化が、にもかかわらず、わたしたちという特殊性の想像力にのみ依拠しているという限界をどのように止揚してゆくのかを問うならば、わたしたちは

〈闘争史〉をけっして「闘争史」として発行してはならない。二重の意味でそうである。第一には「正史」としてではなく、第二に、完結した本としてではなく。共同的なものへと広く浮く出発してゆく、ひとつの過程である。わたしたちの途上をさらすものとしてのみ出版されなければならない。したがって、わたしたちは、既にパンフで出してきている、『〈闘争史〉発行運動を問うために』の第何号かとして発行し、多くの人々の中に、問いそのものとして提出し、様々な自己史ー共同史の中で育まれる第れ号を、(わたしたちはそれを秘かに〈蜂起の永続的現在〉と呼んでみるのだが) 幻視してつづけるだろう。

『2次元から4次元へ』

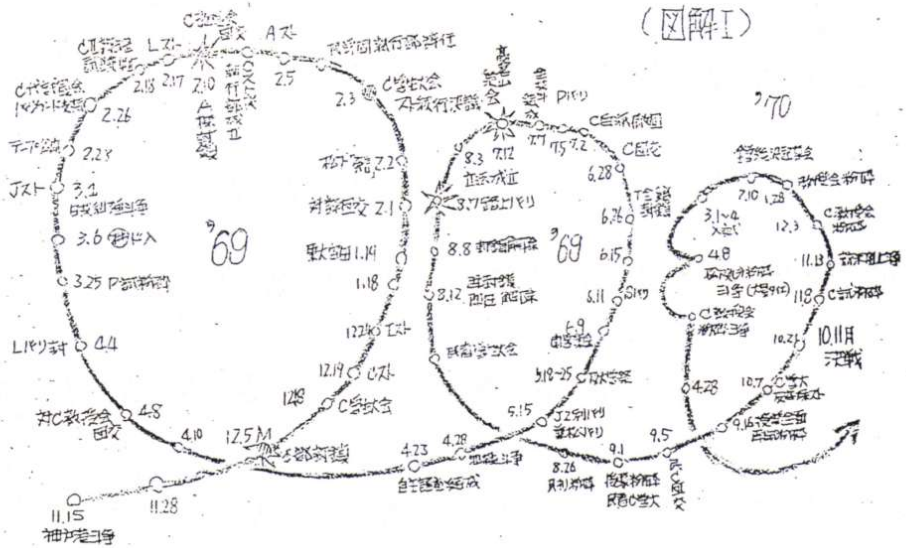
「闘争史」発行運動を問う為に（その1）、において、我々は2次元的断面構造しか引き出せぬ〝資料集〟を見限すべきだと、編集方向を定めた。これは既成の「闘争史」を抜け出す手がかりとなろう。過去の歴程を4次元的にとらえ返すという事は、言いかえれば政治過程の羅列としての資料集から脱却し、大衆（＝大学における大学の全構成員）の原像と、蜂起への回路（or 大衆的爆発力の情念（エネルギー））を表現出来得る編集構造と視点を持つ事であると考えられる。

図Ⅰと図Ⅱはこの事を具体化した図式である。図Ⅰは、横軸に時間、縦軸に大衆的爆発力の度合をとって神大闘争の相関関係を描いたものである。図では、69年と70年の前半しかえっていないがこれを2～3年前に連続させると奇妙な現象が出てくる。

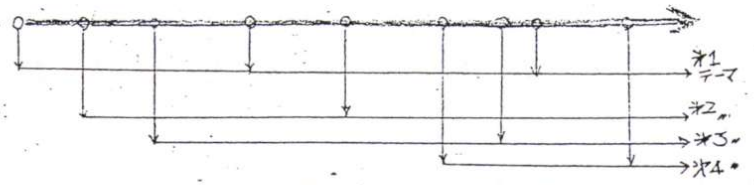
69年、68年とは一年間のサイクルは一つであるが、

NO.7

（図解Ⅰ）



（図解Ⅱ）



69年になるとこつのサイクルを描き、70年後半にはそのサイクルも際々に小さくなって来ているのである。

こうした縦軸座標のとり方は絶対的なものではなく、極めて主観的要素が含まれる危険性もあるが、それを防ぐ手段として、創造力、ビラ配布量、情況的変化、等を考慮に入れる事で客観的視点を保持した。

図Ⅱは、図Ⅰの縦構造が内部にふんでいるいくつかのテーマを時間の流れから抽出する図式である。

我々は神大闘争の過程で「大学闘争」をめぐっていくつかの重要なテーマを捉えなおら政治過程のサイクルを繰返して来た。（テーマ内容は写真参照）このテーマは「学生」であっても他のいかなる存在であっても、「革命」への過程の中で必ず諸個人が出くわすであろう問題点を孕んでいると思える。

このテーマを自己史の闇の中から取り出し、「思想化」させ実践的構造を把握せぬ限り、いくら政治過程のサイクルを繰り返したところで、それは無駄にも経験豊富な政治屋を生み出すだけでしかない。

かかる「政治屋」が作り上げる社会機構の変革など「革命」とはほど遠いものである事は言うまでもない。〈獄中18年〉を自慢するものが必ずしも「革命家」なぞではなかった事は歴史が教える事実である。　我々は経験を誇示する政治の華やかさを見るのではなく、個人経験を一歩普遍性に近ずける「思念」の坂道をよじ登らねばならない。「神大闘争史」を発行する事が、死滅した過去のビラの収集（＝死体処理）であってはならないし、それを止揚する視点が、この二つの図式から発見出来れば少くとも4次元的構造に一歩近ずく事になるだろう。ともあれ、まだ既立への夜は続いている。

明けるのか明けぬのか

この宵闇に
だれかがたいまつを起こした
やさしくうねる髪を夢に垂らし
ひきしまる肢体まぶしく
胎児より無心に眠っている炎よ
……

（夏のはじまり　清水純）

NO.8

〈闘争史〉発行運動を闘う為に

「・・だが、これらは〈私〉にとっては否定しようのない全的前提である以上、通過することなく超っていかねばならない。そしてこの〈主観〉に意義を見い出す事とは〈闘い〉以外にはありえないのである。・・〈闘争〉は〈世界史の生活過程〉の有機的構成部分であり、かつまた〈個人史の生活過程〉を構成するものである以上、その批判的反省は一歴史的現在の根底的批判としての革命的実践としてのお完結していくことができるのである。」（闘争斗争見捨いむけての覚え書－渡辺照子）

弾圧の最後的形態として、闘いの意義の抹殺があげられるでしょう。今、大学当局の手により、「神大紛争」は「過去」のものとされつつあります。神大斗争の「紛争」化と、その「記録」化という二重の圧殺にたいし、私たちは現在的意義をもつものとして神大斗争をとらえかえさなければなりません。

したがって編集過程において、単なるビラの採録だけでなく、それを出した個人あるいは組織の構成メンバーがそれを現在的にどうとらえているのか、ということを追求することが必要であると考えます。

封鎖解除から10～11月にかけて、多くの生まれた21回生の各クラス斗争委（のそれらしきもの）の始とどすべてが政治の季節のおわりと共に私物化していったという否定的情況－それは私たちの斗いは産業的に構造に規定されるものであるのだけれども、その内部において、私たちがその斗いの衝動（＝内的必然性）をどれだけ記録化し、そのなかで共同性を追求してゆけたのか、という問題に関連してくるのではないかと（少くとも私は）考えるのです。

したがって現在的課題は、当時ビラを書いた集合体の構成メンバー（の個人）が過去の否定的総括のうえにたって、その限界性を突破していくべく現在的問題意識をどこう変なうは、その共同作業として出しさっていくということであろうと思います。

NO. 9

過去を通して過去として）ために必要な過程であると考えるが故に、最大限追求されることを要請したいと思います。

'71・3・26 岡野清

主として21回生の方に

〈　〉のむこうへ

松下　昇

この一年以上にわたる生活過程で、私は、なれない手つきでどうをかき続けてきた。何か切迫した必要にせまられて、どうしようもなく、何人かの、いや無数の〈私〉へ手渡すために。いまかきつつあるものも全く同じといってもよいのであるが、いくらかちがう手ごたえを感じてしまう。そのちがいを比喩的にいうと、一枚のどうをよむ時と、〈全て〉のどうを一瞬によむとする時の感じの落差と対応している。

何かが決定的に終り、何かがほくとうに始まりつつあるのだ。その直感にしいられて（いま、この世界は、しいられた発語の季節なのか？）私の原紙にふれようとするとき、いくつかの、次のようなプランが重層的になだれ落ちてくる。それらを〈同時に〉表現し、その原罪性のむこうへ突き抜けていくことが私たちの情況で可能な、唯一の発語であろう。

……

……への註

前ページの原紙にきざんだ文章は、いくつか前の季節に、私が自分（たち）の表現過程を発語しようとした時にかきはじめたまま放置したものである。それを、いま、このような註と共にプリントし配布するまでに至る意味は、怖しいほど重い。以前がこうとして中断した〈プラン〉は、この原紙からはみだしたところで生長し続けている。

〈資料集〉の発行については、私が希望しようとしまいと、いくつかの企画が生起していると共、媒介にして、どこまで情況の枠を突破しうるかということが問われているのだと考えている。発行の企画は、この問いへの答え方の度合いだけ実現されるだろう。

私のささやかな希望は、斗争過程の私の発言とみなされているものは、その日付けとタイトルのみを、必要ならば理由を加えて掲載してほしいということである。なぜ、このような条件を提起するのか、ということを全ての〈私〉と共に追求したい。それが可能になるとき、〈条件〉は止揚される。

ふと思いだしたこと。人定質問に対して、たくに発語しないよりも、仮装被告団の全てが人定質問に応じたあとで答えると発語する時の方が沈黙は、より深いのではないか？

〈闘争史〉発行運動を問うために
―その3―

仮題「神戸大学闘争史」発行委員会

私たちが発行しようとする仮題「神戸大学闘争史」（始めから終りまで、仮称であり、決して「神戸大学闘争史」ではないのだけれど。）は、その主要な構成を次のように予定しています。 ☆ ビラ群（転載） ☆ 討論（テーマ別） ☆ 年表 ☆ リスト（今回掲載のビラだけでなく全ビラの一覧表） ☆ 写真 ☆ 編集をめぐっての問題・・・・・ ―― このパンフ〈その3〉は、今回、第1次リストアップしたビラの一覧表です。ビラは、自然時間にそってではなく、過渡的なテーマにそって編集されています。（テーマについては、パンフ〈その2〉を参照して下さい。）また〈その2〉でも明らかにしたように、ビラの転載をめぐって意見の分岐がありますので、この〈その3〉発行を媒介に、開かれた形で論争を展開したいと思います。

このリストの中に、一枚でも自分の書いたビラや、自分が属していた団体結成のビラや自分に関連のあるビラをみつけることのできるあなたに呼びかけます！

＊ そのようなビラを〈仮題〈闘争史〉〉に転載してもよいでしょうか？

＊ もし、承認されるなら、それはどういう理由からでしょうか？

＊ もし、拒否されたり、条件つきで認められるならば、その根拠は何なのでしょうか？

＊ かつてそのようなビラを出したことが、現在のあなたにとって、どういう意味をもっているのでしょうか？

＊ 私たちの活動に対して、どのような意見があるでしょうか？

ETC. ETC. 返信をお待ちします。

刊行委の註―次のページ以降には、原パンフ・その2に提起されている四個のテーマ毎に区分されたビラの日付とタイトルが列記されており、それ自体が一つの〈ビラ〉であるが、三十数ページになるため、ここには掲載せず、希望者に別冊として届ける。

〈闘争史〉発行運動を問うために、と題された原パンフは、その1～3で可視的には終了しているが、理由の最大のものは、①71年4月に、それまで逆封鎖していたB一〇九教室を大学当局が授業に使用し始めたことに対する粉砕闘争～弾圧により、討論や編集や発行の作業が困難になってきた。②各人の闘争や生活や情況の把握を、たんに〈闘争史〉発行の幅だけでない領域で展開せざるをえなくなってきた。③闘争が引き寄せていくテーマや人間が神戸大学の枠を超えて拡大してきた。

という経過にあると考えられる。各々の理由に補足すると、①については、71年4月までに出現したものと同量ないしそれ以上のビラが出現し、収集や区分の速度をはるかに超えてしまったこと、②については、かつてのメンバーが同じ場に集まりうる条件が、次第に困難になりつつあったこと、③については、さまざまの学内外の共闘者による、それぞれにとっては必然的なビラや裁判関係文書の収集～パンフ化が開始されたこと、を挙げておくべきであろう。

これらの各理由の対象化は、これまでの二十年以上にわたって、いくつもの視点からおこなわれてきているが、最初のメンバーのかなりの参加による討論（の前段階的な出会い）は、やっと開始の兆しをかいまみせたばかりである。これは原パンフ（その1～3）を可視的には中断させたかにみえる各理由の大きさや各人の格闘の深さを逆証しており、この意味からも、92年4月28日の参加者のみならず、この日の討論の記録を読む人々が、今後の討論に参加して下さることを呼びかけたい。

松下昇の抵抗は、このような中にあって、法廷で卵を投げるといった、たわいないものであったが、このイロニックな行為、このファールスはある意味では「予言的」な暴力に属するものであったろう。法廷を茶化し、国家を無視する蛮行として新たな「罪科」を重ねるこの「被告」に弁護団は弁護不能として投げ出し、裁判官は「力」を行使して、この「被告」を遮ろうとした。――私が知っている松下昇は、ここまでである。

「被告」という立場に立つことによって、彼は一種の根拠を問う立場に移っていった。松下昇の立たされた位置は二重の立場である。一つは、革命を指向するテロリズムの立場と、彼自身の立つ立場の「暴力性」の問題を提起すること。彼を市民社会から追放した者達こそ暴力的なものである、と宣言すること。

しかし、そのような暴力性への告発に先立って人間の生存の根拠を明らかにすること。たんぽぽの綿毛の幻影の彼方にすべてのものが断罪された後、それでも、またそれ故に、生きる根拠がそこに有ると宣言すること。それが彼の立場でなかったとしたなら、我々は彼をみくびっていたことになるだろう。

――遠い夢、まことに「遠い夢」。彼のことを思う時、微かな記憶の中で、この言葉が舞い落ちてくる。しかし……既に、時は過ぎ行いた。

⑦

（左ページの①から読んで下さい。）

註－徳永省三氏は69年前半の自主講座運動に積極的に参加していたが、その後の消息は不明であった。ここに掲載したものは80年代中期の表現の中の松下論で、92年5月に友田氏が知人から入手し、松下らも初めて読んだ。ここには、距離がある故の誤解もあるが距離がある故の洞察の方が多く、距離の取り方の優れた例であると考える。…松下

バリケードが解除されて、一挙に奈落が見えた時、闘いが本当の深みへと入り込んだのだったが、ただ、闘いを具体性の反射運動へと取り込もうとする者だけが、街頭闘争や、テロリズムや、乗っ取り行動や、銃撃戦に走った。それは、いきずりの打ち上げ花火であり、用意周到に準備され、腐りかけている社会のシステムのアキレス腱を切って落とす、といったそのような意味での切断では有り得ないものであった。

松下昇がイロニックであったのは、決して解決や、結論を提示しなかったことである。それ故に人々は彼から、はぐらかされた答を聞き、あるいは了解不可能な答を聞いたと思いこんで、いらだったりした。それは、皆、かれの答は問うものの方にこそある、というイロニイを弁えないために起こる困惑なのであった。

しかし、彼の戦術と戦略は強き者の仮装的な<権力>の連鎖、なかんずく《権力なき権力》というパラトックスをめざすものであったため、充分に弱き存在にすぎなかった共闘者から裏切られ続けた。

彼は、いけにえの山羊として、市民社会から追放された。しかも、驚くべきことに「呪われた者」の役割を積極的に買って出たものは、彼自身であった。ある共同性の全員一致の暴力によって屠られた者はまた、その共同性の災厄を祓ってくれた救世主でもある。そのために、彼は充分「聖化」される理由をもっている。彼は全共闘の隆盛と崩壊という全過程に付き合い、その不幸、災厄の祓い清めであった。

それにしても、一新されたのは、いったい何であったのだろう。そして、あの「試み」は、もはや<遠い夢>に過ぎない何者かであるというのだろうか。

松下昇の生きかたは、ある意味で６０年闘争を生きた者への「答」であり、同時に７０年へ向かっての「問いかけ」でもあった。「法廷」や、「国家」や「革命」を主題としながら、彼は最も困難な道を選んだ。状況場への浮沈の激しい政治闘争の世界に最後まで落ち着いて殉じていった。もちろん、市民社会から追放され、スケープ・ゴートとして、闘争の全重量を担おうとした苛烈な生は彼の家族を、沈鬱な時に追いやることもしばしばあったろうと思われる。イエスは、故郷を捨て、妻をも、母をも持たぬ者であった。闘争の終焉後、７年の時が経った時、闘争時代に身籠もられた子が亡くなった。亡き子を六甲の山中へ葬る計画が立てられたが、中断されたようである。その子の死は、闘争の死を象徴したようでもあった。

⑤

たんぽぽの綿毛が舞い、バッハのフーガが流れていた晴れた日の六甲山の山並が懐かしく思い出される。それは、激烈な闘争への序曲でもあり、また終局的な夢のようでもあった。松下昇のはらんでいたものは、「国家」の解体や「革命」の解体より、もっと遠いものであったように思える。つまり、既存の政治権力の解体や、政治・社会的な革命構造の出現や、といった事よりも、もっと深い原型的な事を指向しているように見えた。そのことをアナーキズムと一蹴する立場は、すぐさま政治的な有効性の論理に足を掬われてしまうことになるだろう。なるほど、私達の現世の肉体も、魂も、政治的な有効性や、生活の現実性に深く浸食されてはいる。しかし、原型的なことを指向するということは、更にそういった有効性の現実を構造化している根拠にまで遡って、生全体を再把握することを意味しているのだ。しかし、残念なことに、松下昇の試みはこの根拠への問いと、現実の政治権力との抗争とが密接に結付いていた為、「根拠への問い」を純粋に切り出して世間一般に訴えることができなかった。むしろ、こう言ったほうがいいだろうか、つまり、彼の「行動」そのものが「根拠への問い」そのものだ、といった具合に一元化されていたために、彼の欲望する世界への同意は、同時に運命共同体への同意でなければならない、と受け取られたことだ。それは、「被告」という立場で、闘争の総責任を引き受けながら、<仮装被告団>としてバリケード闘争を、更に全社会的視座から革命の革命として位置付けることを意味していた。この法廷闘争の段階で、時代は様々に<力>の問題を提起した。それは、主要には暴力として次々に噴出してくる意志の顕現の問題であったが、この暴力は一方では革命党派の同族間争いとして、国家権力との対決の不可能性を隠蔽するための、また現実的には、供儀を行うことによって自己存立を図り、革命の予行演習という名の純血統種の育成と訓育という意味をもっているように思えた。

更にまた、一方では、退路を絶たれた反攻としての匿名のテロリズム、無差別のテロリズム、銃撃戦、飛行機乗っ取りという形での諸々の暴力の噴出があった。統一権力を打ち立て得ない諸党派の段階では、個別の暴力による自己主張が唯一の打開策と信じられたのである。しかし、これらの暴力に共通していたことは、予言性ではなく、絶えざるカオスへの引金にだけなっている、ということだった。行き着く先の「虚無の虚無」だけが差し出されていた。義戦と犯罪との紙一重のところで、双頭の顔が見え隠れしていた。予言を持たない暴力は既に様々な意味で革命からは遠い。

⑥

つまり、学生インテリゲンチャの残骸から見ると妙に世間は艶っぽく見えたという訳だ。しかし、私は何処にも自分の席はないのだ、と感じていた。さよう、《ヴェネチアの夜》のような浄福などというものは、そこにはなかった。「薔薇よ、大いなる矛盾よ」といった幾枚もの薔薇の花びらの重なりの中で私は女のこの上ない抽象的な愛と、同時に市民的な幸さえ希求していたのだ。

私は懐かしく思い出している。運動の終焉した頃の虚脱の中の歩行。港近くの喫茶店で連合赤軍事件がエロ・グロの手法でマンガ週間紙に猟奇的に描かれていたのを手にしたことを。何を思ったのか、「赤銅鈴之助」が突如、さる雑誌に載せられており、連合赤軍は鬼の面をかぶった異国人とされ、鈴之助は真空切りでそういった夷狄を爽快にやっつける人物として描かれているのだった。その唐突さに驚くと同時に深い深い闇の虚脱はいっそう拡がるばかりであった。

ある雨の日、港に私の友人が辿りつき、一升ビンを提げて下宿にやって来るや、わびしい敗北の総括を延々と繰り広げていつの間にか寝入っていたりした。

友は、さる鉄鋼会社に就職するための面接にやって来たのだった。

時は確実に経っていき、老いの繰り事を一掃していった。その年は、妙に雨の多い年だった。港の灯と、雨のしずくのしたたりばかりが、妙に記憶に残っている。

③

2　松下昇

全共闘の終焉にあたっての最後の華は、連合赤軍でもなく、「よど号乗っ取り」でもなかった。それは、まさしく壮烈に執拗に＜全共闘＞を闘い抜いた人々、なかんずく＜松下昇＞という固有名詞に象徴されるものである。

しかし、松下昇は、全共闘の「いけにえ」であり、全共闘の責任を一身に背負い、権力の憎しみの標的となった。驚くべきことに彼は、彼自らそれを志願したのである。権力の側（司法・警察権力、大学の権力）から、彼は最も憎まれ、スケープゴートとして選ばれた。降伏した者達、帰順した者達については体制の側に寛容があった。たぶん、それは学生であったからであろう。しかし、この社会に永遠に「否」を言い続ける者を権力の側は許しておく訳にはいかなかった。権力との差異を容認しないアナーキズムを権力は、また一つの「権力」と見た訳だ。丁度、秀吉が利休を憎んだように。また、ローマ皇帝が、キリスト教徒を憎んだように。

かくして、＜松下昇＞は、もっとも聖なる者となった……。テーバイのいけにえとなったオイディプスのように、彼は市民社会から追放された。しかし、＜松下昇＞のことを当の追放した者達が一様に恐れとまた、郷愁をもって、慕っていることは事実だ。＜松下昇＞は常に生存の根源に触れてくる。本質的なことを思考しようとする時いつもそこに必ず＜松下昇＞が、立っている。

不遜な言いかただが、松下昇は、私にとってモデル・ライバルであった。伝説的な意味で彼が神性へと昇華されない以上、彼は私にとって、決して到達できない欲望を振り撒く誘惑者に外ならなかった。

翻って、彼がライバルであるという意味は、私自身が彼自身を否定せざるを得ない何ものかに絶えず苛まれていたことを意味している。それは、私自身の生きんとする意志のなせる技であったのだろう。

松下昇は絶えず不可能な欲望対象について語った。それは、彼一流のイロニイに彩られており、それ故にこそ魅力的であったのだ。このイロニカルなバリケード闘争の貫徹が続けられた時、私達は自分の本当の敗北を知った。もしも、松下昇がいなかったなら私達は本当の意味での敗北を知らなかっただろう。たぶん、自己嫌悪と、他者不信の笑みを浮かべながらムルソーの不条理を弄んでいたかもしれない。

④

私の来歴 または 松下昇論

1 思い出

学生時代に私はマルクス主義の洗礼を受けた。それまでのペシミスティックな、また自然主義的な現実主義の閉塞から抜け出すために、「世界の解釈から世界の変革へ」赴いたという風に当時の私の精神状況を説明してもよいかもしれない。

しかし、常にマルクス主義的な唯物論、経済学説には疑問を持ち、運動に違和感を覚えながらも、諸々の党派闘争にお付き合いもした。当時の学生運動というものは、やはり、生活者の、労働者の組合運動とは、かなり違った側面があったように思う。生活の経済的矛盾、資本と労働者との直接的な矛盾という点からの運動というよりは、むしろ、もっとインテレクチュアルなものであったと思う。だから、運動は社会的な交渉と権利の確立といった具体的な問題よりも、むしろ、政治的、文化的なラディカリズムへ傾斜しがちであった。

そして、彼岸に、なにやら「革命」があるといった一種の永続的な妄想に賭けながら、無限回の敗北を重ねていった。また、なにやら、この経験が革命の予備体験、一種のリハーサルのようなものだ、といった愚にもつかぬ慰めを抱きながら、それ故にいっそう醜悪な党派闘争を展開していった。ある者は、学生インテリゲンチャとしての自己を1905年のレーニンに比して気慰みとしたり、有る者は、大学を去って「プチ・ブルインテリゲンチャとしての自己」を精算したりした。

彼等の全てに共通していたことは、運動の必然性という惰性力に抗しきれないことであった。運動が起こる時には動かず、運動が破滅する時には動くといった自在さに欠けていたことだ。諸々の方向への自在な舵捌きが出来るような豊饒な思想的営為をもっていなかったから、いわば、矛盾の否定的な力に圧倒されて、立ち上がることができなくなった。つまり、市民社会と和解して、革命妄想を精算するか、より格調低く妥協して、小市民運動を継続するか、といった具合だった。それから、ついでに、知盛のように、「見るべきものは、見つ」と独りごちることであった。こういった徒輩に欠けていたものは何だったのだろう。それは、倫理感や、良心やの欠如といった問題ではなく、むしろ「生きんとする意志」に対する根本的な誤解に根ざしていたと思われる。

①

ある日、 「無条件降伏せよ」という命令が下った。何の戦利品もなく、何の交渉による合意もなく、力がより、上級の力によって圧伏させられた。

「降伏」とは断念であり、敗者として、問題から離れて行くことである。《問題》からの離れ方には様々にあったろう。無条件降伏もあれば、玉砕もあれば、法的な争闘もあれば、国家とのストレートな激突もあった。また、乗っ取り亡命もあった。国家という軸を巡って「帰順」とは何か、が問われた。しかし、多くのものが見誤っていたのはバリケードという「力」を支えている「力」とは何かという点であったろう。その「支え」は見掛けは 強そうに見えた。大学の機能はストップした。大学というものはそれほど権力に庇護されていなければ弱いものだったのだ。

しかし、「力」を見誤ってはならない。《物理的な力》は、ただ条件反射としての筋肉が運び得る力にすぎない。システムを作り続け得ない自己運動しない「力」とは要するに泡沫にすぎないのだ。経済的な力、政治的な力はもっと重層的なものであり、財や、法の駆使によってシステマティックに仕上がっているものだ。たまたま、法による物理的排除というものは警察機動隊や自衛隊として存在する。が、それらの破壊力は極めてシステマティックなもの構造的なものである。だから、この構造の物理的な部分だけを攻撃しても、それは次々に補充され、再生され、結局システムとてしは壊れない。革命の肉弾戦を青春と誤認するという笑うべき「ラジカリズム」とやらも、いわば、「生」に対する誤解に根ざしているものである。

ところで、「降伏」とは……。

ある夏の日、私は宿直のアルバイトで官舎のテラスに居た。陽は暑く、路面を照らし、乾いていた。居るものとては私と一匹の犬だけである。私はセリーヌのように孤独だった。

時が経っているのに哀しみは、いつまでも断え間なくやってくるのだった。もはや、気が狂う道しか残されていないのに、それでも、耐えているという時間の無駄さ加減に私はうちのめされていたのだろう。ディオゲネスのように、私は影を追い払うことができたらよかったのに。しかし、陽は、ただサラサラと流れているばかりだった……。

哀しみの感情としては、そこに川端の「雪国」や、井上靖の「北国」のポエジーがあった。歌手、奥村チヨの「北国の空」といったものもあり、森や、街灯や星も残されていた。私は、街の灯に憧れたり、女の愛に飢えていたりした。

②

《5人の集まり》に関する私の感想を以下に述べますと……

元全共闘であるということに現在は何の意味もないのではないか。全共闘運動の提起した問題の質を現在も深化・追求し続けているかどうかが問題であって、「同窓会」とか「反省会」とかいう水準で集まるくらいなら、ひとりでひとりよがりな総括をしているほうがましだと思います。その点で、私は今回のメンバーの全共闘運動の総括のしかたに納得できない面がありましたし、この集まり方自体にも不満を感じていることを付け加えておきたいと思います。

敗北したという人は、誰が何に敗北したのかを明らかにしてほしいです。でないと、せっかく闘って敗北した値打ちがありません。

敗北していないという人は、あのときの悔しさをどう説明するつもりでしょうか。あのときに深い傷を負わなかったのでしょうか。あのときはあのときだよと思い出話のひとつとして懐かしむことができるのでしょうか

たいていの場合、人が寄り合うとさびしなくなるものですが、私には今回の《五人の集まり》は、少しさびしかったです。

92年5月　《光でできたパイプオルガン》主宰・友田清司

註－この文章の前半のレベルで集まった人はいなかったと思う。久し振りに出会う時の、なつかしさを交えた気分は勿論あったが、それ以上に各人の自立した見解が断片的ではあれ提出されていたというのが事実に近い。むしろ友田氏は集会のもち方や討論の展開の仕方に自分で納得できるように参加しえなかったために〈さびしさ〉を感じたのではないか。文章の後半の「敗北」論についても、敗北したという意見を出した唯一人の友田氏に対して他の人々は敗北のレベル～拡がりを内省をこめて問うたのであり、友田氏に対置する形で敗北していないといったのではない。まして勝利しているなどとは考えてもいない。なお、敗北論議などできないさまざまの位置と自分との距離のとり方が、当日の非参加者が友田氏に後で語ったという「松下との、また参加者相互の距離のとり方の節操のなさ」という批評に影響されるよりもはるかに重要ではないか。（松下）

未出現のテーマについて

思いつくままに列挙してみると、狭い意味のテーマというより方法も包括するが…

①大学闘争、ないし神戸大学闘争といういい方でどのようなイメージを、どのような時間の幅で想定しているのかを相互に明確にしていきたい。これは、論議される全てのテーマの相互理解（対立するとしても対立する軸の対比）のために不可欠である。

②自己の固有の体験に先験的に固執せずに、ありえた可能性の振幅の中で一つの方向を選んでいく、ないし選ばされていく瞬間の分岐点を探り、提出していきたい。

③鮮烈な印象を残している光景、どうにも未解決と思える問題を、全く関わりのない人に伝えうるように再構成したい。

④人と人の出会いと別れが何によって規定され、どのように他者や関係性に影響を与えてきたかを、まず抽象的なレベルでもよいからエロスや性を含む生存の全領域について開始したい。

⑤「闘争史」的な刊行が71年段階に構想されつつ、89年の松下による〈年表と写真集〉や今回の記録まで未出現であった意味の追求。

それぞれについての具体的な作業は、すでに個々人の試みの過程で開始されているだろうし、今後もできるだけ共同の形態でも展開するとして、いま特に⑤を媒介して次のことは記しておきたい。

70年代始めの構想が80年代末ないし90年代始めに、やっと断片的であるとしても具体化してきたのは、私たちの格闘してきたテーマ群が対象化のためには、それだけの時間を必要としてきたことを意味しており、これだけでも、69年段階に出たいくつかの他の大学の闘争史や、70年に神戸大学当局が闘争収拾と処分資料の目的で出した紛争史と異なる質を神戸大学闘争（史）が帯びていることを暗示している。明示していく作業はこれからであるとしても…。

しかし、そう考えるのと同時に、集積するビラ類の区分や編集や刊行は、本来はそれらが出現し、流通した時・空間を占拠しつつでない限り不充分である、という20年来の沈黙の叫びが再びこみ上げてくる。そして、ビラ類だけでなく、裁判関係の資料についても、さらに生存の全領域のテーマについてもそうである。そうであるとして、そうであるからこそいいたいのは次のことである。

このような作業を行なう条件が乏しいとしても、乏しさ自体を緊急に、かつ本質的に考察し直し開示していく段階に来ているのではないか。それに相当する苦闘を私たちは潜ってきているし、この段階を逸すれば、未来の全ての人々の試みに深く関わるテーマは忘却と拡散にさらされてしまうであろう。

89年の〈神戸大学闘争史・年表と写真集〉を読んだ遠方の読者から、この闘争史は個別の大学闘争史や日本史ではなく、むしろ世界史ないし〈　〉史に属するのではないか、という批評を受け取ったことがある。私自身は到底このような批評に応えうる内容を提出しえていないことは自覚しているけれども、私がひそかに目指してきた方向を遠方から指摘されて勇気づけられた。このような方向へ既知の、また未知の〈神戸大学闘争〉参加者と共にさらに迫っていきたい。そのための様々の提起や共闘を読者から期待している。

あとがき

このパンフレットの作業中に、偶然のように次のような要旨の表現に出会った。

「大学紛争によって政府も社会も何一つ変化しなかった。しかし、一九六八年から一九七三年に世界はある境界を越え、それまで支配的であった機構や思想は全て過去のものになった。」

これは、まるで全共闘運動を潜った者の表現のようだが、実はP・F・ドラッカー『新しい現実』（89年7月初版、上田・佐々木訳）の一節である。かれは、この「境界」を主として資本制システムの百年前からの破綻の指摘、それを止揚しえないままの「ロシヤ帝国」の崩壊の予言などを導く人間社会の深層での地殻変動の比喩として表現している。私としては、かれの比喩の壮大さが、個々の存在の内部に凝縮している生理〜幻想〜宇宙性のテーマの危機の反転（対極表現）として把握されるための回路が不充分であるという気はするが、ともかく「境界」の時間を「大学紛争」との関連で認識しうる経済的文明批評家がいることを重視したい。

これを〈未出現のテーマ〉の次の〈あとがき〉の冒頭に置いたのは、もちろん理由があってのことであり、それは次のような提起をしたいためである。4・28の出会い〜集まりに限らず、どのようにささやかな出会い〜集まりであっても、〈大学闘争〉をテーマにしていく場合、語り方の部分性にもかかわらず、テーマは必ず語り手の意識や力量さえ越えて、ドラッカーがいう方向を深化させた〈境界〉の世界（史）性に交差していくのではないか。逆に、〈大学闘争〉などに関心をもたない任意の人が日常的な、また時として世界（史）性の話題に興じている場合にも、語り方の部分性にもかかわらず、テーマは必ず語り手の意識や力量さえ越えて、個々の存在の内部に凝縮している〈大学闘争〉開始後の生理〜幻想〜宇宙性のテーマに交差していくのではないか。問題は、異質に見える双方の語り方の往還と、語る領域とそれをはね返す領域の往還について、この世界のだれも、まだ確かな回路を作り、歩み始めてはいないことである。しかし、マルクスではないが、人間は解決しなければならない問題に気づいた瞬間に、解決への一歩を踏み出してもいる。

〜一九九二年六月〜　　松下　昇

註 ― このパンフの原案は92年6月までに完成し、各参加者に届けていたのであるが、応答の遅れと私の入院のために最終的な刊行が宙吊りになっていた。93年1月以降に、〈 〉的に連続する討論を再開したので、宙吊りの討論記録を神戸大学闘争史・別冊1として、再開後の討論記録を同・別冊2として同時に刊行することにした。対比しつつ読んでいただき、今後の討論に参加していただければ幸いである。

〜一九九三年四月〜　　松下　昇

作成＝九二一年六月、刊行＝九三年四月
刊行委の連絡先の一つ
神戸市灘区赤松町一の一　松下　気付
☎〇七八・八二一・四九八四